
∞ CHAOS ~ REMEMBERS ~

日向 剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

∞CHAOS〜REMEMBERS〜

【Nコード】

N7024V

【作者名】

日向 剛

【あらすじ】

注、『∞CHAOS』の続編です

龍との戦いから2年、地上、地下両世界が復興し、瑠奈達能力者も役目を終え、再び散り散りになった。だが、とある”疑問”が、さなる災厄を巻き起こす…

新キャラ紹介？

「…久しぶりだな、読者の皆。俺がこの物語の一応主人公、烈火瑠奈だ。龍との戦いから2年が経ち、地上、地下ともに復興が進んでいる。俺以外の仲間も復興への援助へ出回っていたが、ようやく一息つけるようになった。…でも、やっぱり平和は長くは続かない。…なんでかって？それは作品の中でいずれ語られるだろう。俺もそれに気付いた頃から物語が始まる。前回で終わっただかと思っていた”神”対”人”の戦いがまた始まる…」

物語の登場人物、特徴（一話登場キャラのみ。2話以降登場キャラは随時紹介予定）

烈火 瑠奈…22歳、男”炎”と”闇”の守護者。通り名は”憤怒の炎”。この物語の主人公。刀に炎をまわせ突撃が戦い方。前作から頭に巻いてたバンダナを今は墓に置いている。地下能力者ランクは”零”（能力者ランクは話中に説明予定）

光 瑠璃…21歳、女

世界で数が少ない”愛”の守護者。通り名は”愛の巫女”。前作同様メインヒロイン。一応刀を扱えるが、メインは光の魔法。髪を止めていたりボンを今は墓に置いている。能力者ランクは”零”。

灼沢 紗菜…20歳、女

瑠奈と同じく”炎”の守護者。刀でぶったぎるスタイル。最近はおしゃれを気にして、ストリートを束ね、自称”ワンテール”をしている。ブラコンの気あり。能力者ランクは”参”

夢村 未来…25歳、女

極めて稀な異端能力、”夢”の守護者。重山飛鳥の亡き後、メンバ

ーの中でお姉さんの存在。爆弾などを駆使して戦う。最近の悩みは美容の維持らしい。能力者ランクは”弐”

風野 真人…22歳、男

”風”の守護者。通り名は”裏切りの風”。拳で語る見た目にそぐわぬ熱い男。瑠奈と瑠璃の近づききらない関係に苛立ちを感じている。能力者ランクは”壹”

有音 渚…21歳、女

夢村同様極めて稀な異端能力者。”音”の守護者。装備は愛用のギターを腕に装着し、音波での精神攻撃が得意。最近新しいギターを買うお金がなくて困っている。能力者ランクは”参”

重山 雫…19歳、女（初登場）

龍との決戦で死亡した重山飛鳥の妹。世界に二人居るか居ないかとされる異端能力、”重力”の守護者。見た目は重山飛鳥にそっくり。瑠奈を目の敵にしている。シスコン。能力者ランクは未登録。

第1幕1話：始まりが迫る日常

「新組織、道場」

昼の道場。そこには男と女が一人ずつ、木刀をもって打ち合っていた

「たあああつ！」

「…甘いつ！」

男…瑠奈の一撃が、女…灼沢の脇腹を捉える。灼沢はよろめきながらも、すぐに体勢を建て直し、再び突っ込む

「そこだああつ！」

灼沢は瑠奈の頭上から斬りかかろうとするが、瑠奈はその手が読めていて、瑠奈はあっさりと灼沢の木刀を自分の木刀で受け止める

「…！ぐうつ…」

「悪いな紗菜…。俺は、手加減が出来なくてなあつ！」

そしてそのまま灼沢を床に叩きつけ、喉に木刀を突きつける

「…つつ！」

「俺の勝ちだ。分かったろ？まだ俺には敵わねえって…」

「も…もう一回…！」

灼沢は息を荒くさせながらもまた木刀を取る。だがあきれた瑠奈はその刀を払い除けた。その行為に驚きを隠せない灼沢は瑠奈に掴みかかる

「ち…ちよつと！まだ余裕あるんでしょ！？もつと稽古付き合つてよ！」

「…お前なあ、数をこなせば良いってモンじゃないだろ？悪いが、これ以上無理をさせてまで稽古する気はない」

「わ、私は無理なんて…！」

「バー力。お前のその服を見てたら無理してるのがバレバレだ」

「……!!」

灼沢は白いＴシャツ一枚で瑠奈と稽古をしていたが、そのシャツが血で赤く滲んでいたのだ。それを見た瑠奈は灼沢に無理をさせたくなく、中止を持ち出したのだ。だが、それでも灼沢は諦めず瑠奈に払われた木刀を取りに行こうとする。それにさらに呆れを見せた瑠奈は灼沢を羽交い締めにし、灼沢の動きを封じた

「は、離せえっ！まだやるのーっ！」

「ワガママを言うな、これで身体を壊したら元も子も無いだろうがつ！」

「あらあら、何をしてるの、紗菜ちゃんに瑠奈君？」

その道場に夢村が現れた。瑠奈はその姿を確認するや否や

「悪い夢村！その木刀をちよつとどっかにしまってくださいないか!？」と頼む。夢村はニコツと笑い、状況を察したようで木刀を室外に持っていった

「ぶっ……どうして皆止めるのさ……」

「当たり前だ。最近のお前は随分と熱心なのはいいが、だからといって怪我をしてまでやることじゃねえだろ？」

「そ、そりゃあ……そうだけど……」

「確かに、一週間後に試験があるとなれば、焦るのは分かるがな？」龍を撃退後、地下世界は瑠璃が統治することになった。そして地下のこれからの統治の仕方を考え、有能な能力者を新組織に入れる為模擬戦を行いその力を計る制度を作り出した。その能力者ランクは6段階に分けられ、零、壹、貳、参、四、五の六段階になる。そして新組織に入れるのは参の人間までである

「定員がないんだ、それにお前は参くらいの実力はあるだろ？」

「わ、分かんないよ……こうしてお兄ちゃんと戦っても、まだ一太刀も入れてないし……」

「まあ、見るのは土屋だからな。厳しいことに違いは無いな」

落ち込む灼沢に余裕の烈火。二人の“炎”の能力者は明暗が分かれていた。そこに夢村と瑠璃もくる

「あら、紗菜ちゃん、諦めたのかしら？」

「おはようございます、瑠奈さん、灼沢さん」

「ああ、おはよ…って、もう12時回ってるぞ…」

「てへへ…少し寝過ぎちゃいました」

「新組織部隊編成模擬戦三日前なのに、代表は緊張感は全くないわね…」

「夢村の言う通りだ。…お前は選らばる奴に守られるんだ、少しは緊張しとけ？」

その瑠奈に瑠璃は満面の笑みで

「大丈夫です」その時はプライベートで瑠奈さんに守ってもらえれば」

「…ったく…。まあ、肩に力が入ってないのは関心だな…」

「私たち以外にも零さん、天鳳院さん、聖澤さん、風野さん、有音さん、明源さんは呼ばれてるみたいですね？」

瑠璃はポケットに閉まっていた模擬戦出場者リストを取りだし、それを眺めていた

「…ただ、天導さん、日向さん、泉野さんは呼ばれてないみたいですね…」

「仕方ないだろ、あれから天導は消息不明、日向、泉野は元はといえば巻き込まれた人間だからな」

「…そうなんですかねえ…」瑠璃は不満の色を浮かべていたが、瑠奈は気にする気は無かった。だがこの「天導が消息不明」と言う事が既に事件の始まりだとは今は知るよしもなかった…。そして3日後…

Ⅱ 新組織、闘技場Ⅱ

「…では、集まったようだな、諸君！」

土屋が沢山居る能力者の先陣に立ち、指示を出す

「戦いは1対1のサシ勝負、勝ち負けの他に力の使い方、戦い方等も選考基準に入るからな、諸君、気張っていけよ!」

「…相手はクジで決まる、か…」

この1対1の戦いのカードはクジで決まるようで、瑠奈も既にクジを引いていた。クジには”1”と書かれていたため、瑠奈は一番始めの対戦となるようだ

「…さて、誰が来るのやら…」

瑠奈は刀を持ち、闘技場の舞台の上にあがる。そして…対岸に上がったのは…

「………」

「!?!?…お前は…」

「両者、構え。…始めっ!」

2話：試験開始・烈火 瑠奈対重山 零

「新組織・闘技場」

「では、両者前へ」

「…ふう…」

瑠奈達は能力者の格付けを行う模擬戦をすることになり、第一回戦に出場することになった。そして相手は…

「…初めまして、かな…。お前に会いたかった」

「…いつ!？」

瑠奈は驚愕を隠せなかった。対戦相手が…龍の戦いで死んだはずの重山飛鳥にそっくりだったからだ。それに相手の名は…

「私の名前は重山…重山零だ」

「なっ!?!？」

飛鳥と同じ名字、似ている容姿…唯一違うところといえば、身長くらいだろうか。容姿端麗、そして構え…似すぎていた。それが瑠奈に取って大きな足枷となる

「…まさか…飛鳥の、妹…？」

「ふん、バカじゃないらしいな。その通りだ」

「では、試合、始め!」

そして土屋の号令の元、戦いが始まった。はじめは互いに舌戦となる「まさかこんなとこで…それに、妹が居た事実なんか知らねえぞ!？」

「当然だ。姉は私の存在を他人に言わなかった。そして私もスラムに自ら身を潜めた。分かるはずもあるまい」

「分からねえな、何故隠さなきゃいけなかったか…、そして、何故今更こんなとこに!？」

「復讐だ」

その一言を重山がいい放つと、重山は姿を消した。重山が居た場所

には地面がめり込んでいた。それを見た瑠奈は焦りを募らせる

「…ちっ、いきなり消えんのかよ！」

「ここだ」

瑠奈は声のした方を向けると、重山は既に拳を振りかざし、自分の場所に落下してきていた。それを見た瑠奈は忽ち防御体制を取るが…
「真つ当な判断。だがそれも…私が押し潰す！」 G・F”（ジオフイスト）！」

重山の拳は瑠奈の剣ごと地面に叩きつけた。瑠奈は防御しきれず剣は弾かれ、自分自身は壁に叩きつけられる

「…拳が…重い！」

「私の拳は普通ではない。姉とは違う力だが…それでも姉と同等の力を出せる！」

瑠奈はさらに攻め来る重山の攻撃をなんとかかわしながら、反撃の糸口をつかもうとするが刀はあらぬ方向に吹き飛ばされ、重山の連撃もあり攻勢には転じれなかった

（…どういうことだ、この拳の重さ、飛鳥の”無”の力のような強化の力じゃない。だとすると…）

「隙有り」

「！？しまっ…」

「”重碎撃”」

「ぐあっ…！」

一瞬判断が遅れた瑠奈は、重山のストレートを腹に受け、地面に叩き伏せられる。瑠奈の顔面からは血が流れ落ち、吐血も止まらない、もしかしたら肋骨を二三本折られただろうか

（…落ち着け、相手は飛鳥の妹、何か糸口はある。何か…）

だがそこに重山の手が伸び、瑠奈の髪の毛を掴み、引っ張りあげる
「…っっ…！」

「…私は、姉を殺したお前を許さない。姉の様に手加減は出来ないが、それも慈悲だ！」

そしてそのまま地面に叩きつける。その行為を何度も行い、瑠奈は

さらに流血を重ねる。見かねた土屋が試合を止めようとするが…

「見ちゃおれん。そこま…」

「待ちなさい、土屋」

その声を止めたのは瑠璃だった。その瞳は瑠奈を信じてる目だった

「瑠奈さんはまだ動けます」

「だ、だが…」

「あの人がこんな簡単にやられるくらいなら、今世界は破滅してま
す。…もう少し待ちましょう」

重山は何度も瑠奈を地面に叩きつけたあと、壁に瑠奈を叩きつけ、
少々距離を取る。その間に何かの力を拳に込めていた

「…ぐっ…」

「所詮この程度…道理で姉は死ぬわけだ」

「…」

瑠奈は答えない。ただ目をつむり、諦めたように佇んでいる。それ
を見た重山は少し笑い

「だが、今ここでお前が死ねば、姉の仇が討てる。…私の力、それ
は”重力”だ」

「…重、力…」

瑠奈が辛うじて目を開ける。だがその目に沢山の血が入り、まとも
に見えては居なかった

「この力を自在に操り、私の拳に力を与える。…姉のとは違い力を
制御するのは難しいが、慣れれば”無”以上の力を期待できるのだ」

「…道理で、拳が…重い訳だ…」

すると瑠奈はゆらゆら立ち直し、刀を抜く構えを取る。だが瑠奈自
身は刀を今持っていない。一体何をしようとしているのか…。その
行為が頭に來たらしく、重山が突っ掛ける

「何をしたいか知らないが、これで終わりだ、烈火ああっ！」圧

壊撃”！！”

「…悪いな、雫とやら…」

突っ込んでくる重山に対し、瑠奈はまだ刀を抜く構え。そして重山

が間合いに入った瞬間だった

「烈火流剣術…」炎飲斬」（ほむらいんざん）！！」

烈火が重山の隣を居合い抜きのように通過すると、重山の前方から炎で包み込み、爆破したのだった。重山は一瞬の打ちに打ち上げられる
「がはっ…！？」

「飛鳥の戦い方は電車道の様に真っ直ぐだ。だったらちよつと軸をずらせば簡単にかわせる。…お前はそれが顕著だ」

「…まず…いつ」

重山は空中に居るため、体勢を整えられない。さらにその上方に瑠奈が飛び上がる。手には刀、そして力を解放し…

「悪いな雫。お前は甘すぎる。」崩壊花火”！！”

瑠奈の刀が重山に触れた瞬間大爆発を引き起こした。そして煙が晴れると、立ち上がっていたのは瑠奈だった…

「し、勝者…烈火、瑠奈」

「…ガキが。飛鳥ならあるとき真っ正面から来ないっての」
そして額の血をぬぐいながらその場を瑠奈は去っていった…

3話：絆対血縁。やるせない思い

「新組織」

「っが…は…」

瑠奈は血を流しよるめきながら会場を後にした。重山との戦いで深手を負ってしまったのだ

「…さすがは…重山の妹か、少し甘く…見てた…」
「…だろうな…！」

だがそこにさつき倒した筈の重山が仁王立ちしていた。だが服は焦げつき、額からは血が滴り落ちている

「…お前…！」

「私は…諦めない…！覚悟おっ…！」

そして重山は拳を構え突撃してくる。瑠奈は意識が朦朧とするなか、なんとか一撃目を避ける

「…っ…！」

「…やべえ、視界が霞んでやがる…貧血か…？」

「次は…外さない！」

そして2撃目がある。瑠奈は避けようとするが、足元がふらつき直撃を受けた

「…ガハアッ!?」「重力でお前をその場に固定する…！…二発目え！」

そしてさらに瑠奈を殴り付ける。瑠奈は重力を強められ、その場でサンドバックにされていた。だかそこに風の刃が飛んできて重山に当たり、重山を吹き飛ばした

「ぐっ…！？」

「…？」

「よお瑠奈、随分な有り様だな…手加減してる場合か？」

「瑠奈さん！大丈夫ですか!？」

そこに風野と瑠璃がやって来たのだった。瑠璃はすぐに瑠奈に駆け寄る

「瑠奈さん！瑠奈さん！！」

「き…聞こえてる…平気だ…」

「どこがですか！？…何で、こんな…」

「さあ、な…。俺は飛鳥の仇、らしいが…」

「…重山！！」

瑠璃は風野の攻撃を受けよろめく重山の前に立つ。そして…

「な、何よ…」

「飛鳥は…本当に瑠奈さんは仇なんですか！？」

「そ、そうよ。烈火は姉さんを見殺しにした張本人…」

「だったら私も同じで、飛鳥を見殺しにしました」

「…！！」

瑠璃は真面目にそう告げると、重山の表情がまた剣幕になる

「…なん、だと…！」

「だけど、飛鳥は自らその道を選んだ…、自らの意思で！それを貴女は勘違いしてる！」

「黙れ！綺麗事を並べても、姉さんは生き返らない！」

「重山飛鳥は…死にたくて死んだんじゃない！！私達と願いが一緒だから死んだんだ！本当は生きたかった、でも…飛鳥は不器用だから、私を生かそうとした…だから死んだ！」

瑠璃が涙ながらに訴える。その姿に場にいた三人は黙る

「私の力不足もありましたけど…、飛鳥は、私達を生かしたんです！その思いを…勝手にねじ曲げるなっ！」

そついで放つと、瑠璃から急に光の力が解放される。その力に反発する瑠奈は壁に吹き飛ばされる

「あああああっ！」

「…何よ、これ…」

「まずい、まずいぞ烈火あ！目え覚ませ…早くしねえと！」

「…ちつ。言われなくても…！」

瑠奈は力を解放するが、傷が深く最大限の力は出せない。その中で自分の火力を全て機動力に回し、瑠璃に体当たりをかました。瑠璃はまともに受け、床を転げ回る

「あうっ…」

「…目え覚ませ、瑠璃。こいつにとつちや飛鳥は肉親だ。…憎い気持ちも分かる」

「…だ、だけど…」

すると瑠奈は笑みをこぼし、飛鳥に対し

「だったら…後日弔い決戦をしようじゃねえか？ 雫とやら…よ？」

この瑠奈の提案に対し、重山は少し考えたが

「…いいだろう、乗った。貴様に引導を渡すのは後日にしてやる」

と、瑠奈の提案を受け入れた。瑠璃は驚き、先程ぶつけた左腕をさすりながら瑠奈の身を案じた。瑠璃は瑠奈の傷が深手であることに気付いているのだ

「で、でも瑠奈さん…その怪我はすぐには…」

「決戦は3日後、ロストキングダムでやる。あそこなら誰も傷つかねえ」

「…どこでも構わない、貴様を殺せるならな」

「だから今日は退け。ここで戦ったところで共倒れが関の山だ」

そうして重山は新組織を去った。瑠奈は血が頭に回ってないらしく、程なくして倒れてしまった。その場に風野、瑠璃が駆け寄る

「烈火！？おい烈火！！しっかりしやがれ！」

「瑠奈さん！…直ちに瑠奈さんを救護室へ、急いで！」

そして風野は瑠奈を担ぎ、瑠璃と風野の二人は急いで救護室へ向かった…

「新組織、救護室」

「……」

「この…傷は？」

「今日の試験によるものだ。あいつ、手加減してるからこんな事に…」

救護室には天鳳院が居て、天鳳院が手当てが出来ると言うことで天鳳院に看てもらっていた。瑠璃は心配し、しきりに瑠奈の顔をのぞき込んでいた

「肋骨と胸骨、鎖骨にかけて複数箇所骨折。それに全身打撲に捻挫…こんなの、簡単になる傷じゃない」

天鳳院は瑠奈の有り様を見て普段は感情を表に出さないのだが、驚きを露にしていた。瑠璃は天鳳院に焦りながら、3日後について聞く
「3日後に決戦があるんです…なんとかありませんか？」

この問いにはさすがの天鳳院も呆れ

「さすがに無理。…3日後に意識を取り戻してるかも分からない」
「な、なら私の治癒の力で…」

この言葉に対しては表情を曇らせ

「それも無理。この怪我を治す程の力を使うのは貴女でも耐えられない」

「…そんな…」

瑠璃の力はとてつもなく大きな力を秘めているが、代わりに使用したときの代償があった。現にさつき暴走したときの代償で瑠璃は未だに頭痛が収まらなかった

「やっぱ無理だぜ、3日後なんて…この馬鹿が、何を根拠にそんな事を切り出しやがるんだよ」

「…風野さん、天鳳院さん、…少し席を外してくれませんか？」

瑠璃は神妙な面持ちで二人に話す。二人は納得した表情で

「ああ、分かったよ」

「…うん」

救護室から出ていった。その場にはベッドで意識を失っている瑠奈と瑠璃のみになった。瑠璃は瑠奈の傷だらけの手を握り、涙を流す。3日後、瑠奈は果たして意識を回復し、重山と対することが出来るのだろうか…

「…瑠奈さん、なんで貴女があんな形で再戦を望むか、私には図りかねます。でも…私、貴方が望むなら文句は言いませんから。…だから、お願い。早く起きて…」

4話…イフ、召喚!!

「新組織、救護室」

「…」

「…ん、うん…」

能力者選抜試験から1日、瑠璃と瑠奈は救護室で一夜を明かしていた。瑠奈は相変わらず意識は戻らず、瑠璃は看病していたが、知らぬ間に覆い被さるように寝てしまっていた

「…いけない、私…」

「…」

布団を少し捲ると、上半身を包帯で巻かれた瑠奈の姿がある。瑠璃はその姿に表情を曇らせた。その部屋にノックがされる

「…はい」

「ずっと付きつきりかしら？貴女も熱心ね…」

「…夢村さん？」

入ってきたのは夢村だった。ただ、夢村は傷だらけだった

「…その傷、どうしたんです？」

「ああ、これ？ちよつと召喚テストをね…」

「…召喚…テスト…？」

召喚という言葉に瑠璃は引つ掛かりを覚えた。今の地下の住人に召喚が行える能力者は居なかった。今回の能力者の試験でも召喚を行った人間は居なかったからである

「ふふ…何でって顔してるわね？簡単よ…私、召喚の技能を覚えたのよ」

「夢村さんが？でも貴女の力…、あつ!？」

「そう、”夢”の力を召喚に用いるのが可能なのよ」

そういうと、夢村は瑠璃の手を引き外に出ようとする。瑠璃は慌てて立ち止まり

「ち、ちよつと…瑠奈さんが一人に…」

「大丈夫♪ちゃ〜んと代わりを連れてきた♪」
すると、さらに一人入る。その人は…

「お久し振り、瑠璃」

「…聖…！」

聖澤だった。背中に大きな鎌を背負うようになった以外に代わりはなさそうだ

「その間は私が見てる。安心しなさい。…きっと、瑠璃の力にもなるだろうしね」

「で、でも…」

「重山の妹との決戦」

「…！」

「今の烈火じゃ動くのも無理そうだけど、私の治癒の力ならなんとか戦えるまでなら…」

「でもそれじゃあ貴女は…」

「私はしばらく戦闘要員にはならないでしょうから…それに、烈火が目覚めたとき、瑠璃が寝てたら…意味がないでしょ」

聖澤の覚悟の目に、瑠璃は諦め

「分かった…、お願い聖」

「…はいよっ！」

「じゃ、しゅっぱーっ！」

そして夢村と瑠璃が駆けていった。聖澤は瑠奈の近くの椅子に腰掛け、ため息混じりに呟く

「はあ…なんなんだろ、やっぱり光の血、なのかなあ…。…兄さん、あれから、どこに…」

「…」

「とにかく、そのためにも貴方には起きてもらっわ。” 治癒法陣”」

「…これでよし」

「…これ？」

夢村と瑠璃は道場で召喚テストを行うことにし、既に夢村は力を解放していた

「ま、証明するにはやっぱり見なきゃ分からないからね…じゃ、行くよ…」

すると夢村の周りに沢山の赤い帯状の物が輪を作り回り始めた。夢村は手を正面にかざし、力を増幅させていく

「…呪文は無いんですか？」

「あのねえ…別にRPG系じゃないんだから、呪文なんかあるわけないじゃない」

「でも大体召喚っていったら、なんかかつこいい呪文を言って、魔方阵からばーんってかつこいいドラゴンが…」

瑠璃が必死に脳内の召喚を説明しているが、まるでゲームのようで夢村は呆れていた。そして赤い帯状の輪の動きが加速し…

「じゃ、無駄口はやめ。行くよおっ！！」 召喚輪・フレイル”！！」

そして夢村の手から放たれた一筋の赤い光が地面を照らすと、そこから筒状に光が立ち上り、それが消えると…そこには

「…おろ？ここは…どこ？」

一人の少女が座っていた。透き通る赤い瞳に赤い髪、胸元に光る赤い石。そして、人間と同じ格好…

「…夢村、さん？」

「あ、あれれ…？こんなはずじゃ無かったんだけどなあ…？」

夢村は冷や汗をかきながら瑠璃とその少女から目を背ける。こんな予定ではなかったようだ。瑠璃はその少女と話し始める

「ねえねえ、貴女？」

「…むー、お姉ちゃん、誰？」

少女は警戒していた。いきなりこの世界に呼び出されているので無理もないが。ただ瑠璃はそれもお構いなしに話を始める

「お名前は？」

「…私の名は、イフリータ、イフリータⅡFⅡバーズ。イフって覚えて欲しい！」

「イフは…何者？」

「私は人間…かな？というよりは、人間に近い存在だと思う」

瑠璃は笑顔で話を続ける

「もしかして…火の力を使える？」

「うん！…見ててっ！」

そういうとイフは人指し指を立て、石に狙いを定めると…

「ビームッ！！」

「…！？」

熱線を放ち、石を砕いた。イフは相当な力を持っているようだ。それを見せると、今度はイフが瑠璃に

「ねえ、何で私を呼んだの？」

「いきなり本題ですか…」

「また唐突な…」

「ねーねー、何で呼んだのーっ…って、あ」

ただ、イフが何かに気付く。いつの間にか道場の入り口に腕を包帯でグルグル巻きにした瑠奈が立っていた。意識ははっきりしているようで

「よう。瑠璃、夢村」

「…る、瑠奈…さん？だ、大丈夫…じゃ…ないですね」

「…馬鹿ね、熱血馬鹿ね」

「おい、随分な言われようだな」

黒の半袖YシャツにGパン、そこから見える肌という肌に包帯が巻かれ、所々血が滲んでいた

「…で、そいつは？」

「で、このにーちゃんは？」

瑠奈とイフが互いに指を指し、瑠璃と夢村に聞く。二人は困った顔で
「…あはは…」

苦笑をした。：これが、事態を好転させることになる…

「こいつ、誰だ？」

「この人、誰？」

5話…女難？

「新組織、道場」

「…む…」

「…あ？」

「…」

道場には今瑠奈、瑠璃、夢村、そして召喚により呼び出されたイフリータが居た。瑠奈とイフリータは互いが奇な存在に見え、警戒を解かなかったのだが…

「ねーねー、君…もしかして、炎の能力者だったり？」

「…!!？」

一同はイフの発言に驚きは隠せなかった。この子はやはり炎を扱えるのか…と考えていると

「なら…試させてもらうよっ！『虹の能力者』!!」

そっつい、腕に炎をまとい瑠奈に殴りかかってきた。瑠奈は痛む身体を引きずりながらかわす

「る、瑠奈さんっ!？」

「瑠璃、夢村っ!どけえっ!」

瑠奈は瑠璃と夢村に撤退を促したが…瑠璃が逃げようとするが、夢村がその場から動けなかった。どうやら召喚をすると行動に制限がかかるようだ

「ゆ、夢村さん？」

「私は動けないわ。それこそこの子をしまわないとね」

「…だったら、私も逃げません。この戦い、見せてもらいますね？」

「なっ!?!…当たっても知らねえからな!？」 焰ノ風!」

瑠奈は炎を巻き上げ、それをイフに向かわせるが、イフはそれを片手で消し去る。イフは無邪気に笑いながら

「あははーっ！それじゃ私に傷1つ付けらんないよー！」

そういうと、急に室内の温度が上がる。そしてイフの姿が消えた

「…くそ、陽炎をうまく使いやがるな…」

「お、分かってるじゃーん！」

すると瑠奈の前に炎の短剣を持ったイフが突如現れ、短剣で瑠奈に襲いかかった。だが瑠奈はある程度の奇襲は分かっていたため、刀でその攻撃を防ぐ。終始イフは笑顔だった

「…夢村さん、まだしまえませんか？」

「ええ、無理ね。むしろ私が召喚した事になってないみたい。…術式が解かれたわ」

すると夢村が瑠璃に手の甲を見せる。"夢"の字は既に消えていた。夢村は暑いのか額の汗を拭いながら

「…それにしても、瑠奈は本当に女難ね」

と、さらっと言う。その言葉の意味が分からないと言う瑠璃の顔を見て、夢村は付け加える

「瑠璃や紗菜、泉野や日向、イフ…。瑠奈は女性といると苦労するのね？」

その頃戦いはさらに激化していた。瑠奈は力を防御に回し、刀で斬りかかるがイフは陽炎で分身を作り、その攻撃をかわしている。だが互いの表情は晴れやかだった。そして、急にイフが攻撃の手を止め、武器を消したのだった。その行動に瑠奈も刀を鞘に納めた

「もーいっかなー、大体強さも分かったし！」

「…試されてたつつう事か、俺は」

「そそ、私が貴女にさらなる力を与えるに相応しいか、をね」
「新しい力…？」

「ちよっといっかな…我慢してね？」

そういうとイフは瑠奈に近づき、瑠奈の胸部に炎が入った珠を近づけた。すると瑠奈は強制的に力を解放させられる

「な、なんだ！？」

「…そういう事かい、じゃ、私は貴女に力を与えただけ、か」

夢村はつまらなさそうに溜め息を吐く

「…力を？」

「要するに、イフは炎の守護者、それを私が力を与え、目覚めさせたの」

「でも瑠奈さんを媒体にして召喚をしたわけじゃ…」

質問をする瑠璃に夢村は赤い宝石を見せる。それは昔瑠璃が拾った

『灼熱のルビー』だった

「…これが…」

そして瑠奈の方はイフの持つ珠の光が消える。そしてイフがさらに瑠奈に近づき…

「じゃ、契約するね？」

「契約？…何のだよ」

「私は貴方を正式に虹の守護者と認めるってねっ」

「はあ？虹って…俺は炎と闇しか使えないんだが…」

「つべこべ言うなっ！」

そして…イフは瑠奈に抱きつき、キスをした…

「！！！！？」

「なっ…！！？」

「…る、な、さん…？」

「契約、完了っ」

新キャラ紹介？

今回の新キャラ紹介のために訪れたのは…薄紫のショートヘアを靡かせ現れた。…光瑠璃である。

「皆さん、お元気ですか？」光です♪じゃあ、今回もキャラ紹介をして行きますね♪」

聖澤 聖…21歳、女。瑠璃の姉であり、天導の妹。瑠璃と同じく光の守護者。武器は鎌。瑠璃が優遇されるのを良しとしないが、瑠璃には優しい。好物は唐揚げ

イフリータ「F」バーンズ…年齢不詳、女。容姿的には瑠璃と同じ21歳？炎を司る『能力の女神』の一人。瑠奈にキスをし、虹の能力の力を与えた。他に仲間が沢山居るらしい。ちなみに瑠奈が好き。料理は殺人的レベルに下手

闇本 伶…22歳、男。瑠奈の持つ闇の力が瑠奈に影響を与えると瑠奈の身体を借り現れるいわゆる『もう一人の瑠奈』である。現在は瑠奈の為に力を惜しまないが、多少自由気まま

6話：烈火に備わるさらなる力"虹";

Ⅱ新組織、道場Ⅱ

瑠奈はイフリータに試されていた。イフは瑠奈が虹の能力者にふさわしいかを見極めていた。そして契約という事でイフは瑠奈にキスをした。…現場はそれから少し時間が経過し、瑠奈、イフ、瑠璃、夢村で四人で輪を作り座っていた。だが不気味な沈黙がその場を覆っていた

「…契約って…これやって何が変わったんだ？」

その沈黙を破ったのは瑠奈だった。瑠璃はジト目で瑠奈を見て、夢村は警戒の眼差しでイフを見つめている。そんな状況をよそにイフは瑠奈の腕に抱きつきながら

「君は虹の力に目覚めたのだよ」

「…何も変わってないんだが…」

「あ、そー言えばこれを渡すのを忘れてたよ」

そっくりイフは沢山の石がついたブレスレッドを手渡した。瑠奈はそれを腕にはめ

「…これでどうしたらいいんだ？」

「起動ネームは”起陣”^{オープンチャネル}。そしてだよ」

「…”起陣”」

そう瑠奈がいうと瑠奈の足元に魔方陣が形成され、石が輝き出した
「そして自分の使いたい属性を叫ぶ！するとね…」

「…”イカズチ”！！」

すると瑠奈の髪が黄色になり、腕にプラスナックルが装備される。
身体には電気が帯びていた

「瑠奈さん…その力は…」

「…マジか…本当に使えるのかよ…」

瑠奈達は驚いていた。ただでさえ瑠璃や瑠奈のように二重能力を持

つ人は少ないのであったからだ

「頑張つて使いこなしてね♪これを起動したら私も呼び出せるからねえ♪」

するとイフも炎と共に消えていった。瑠璃は凄いい剣幕で瑠奈を睨み付ける

「…瑠奈さん…」

「な、なんだよ瑠璃…」

「…不可抗力でも、ショック…です」

「き、気にすんなよ！別にイフも俺が好きでこんなことやったわけじゃないだろうし…」

「バカね」

「バカですね」

瑠璃と夢村があきれたように言い放ち、瑠奈を置いてその場から離れる。瑠奈も遅れてついていった…

「ちょ、お前ら…待ててっ！？」

「……………」

「…以上が報告であります」

「…ほう、ついに現れたか」

とある場所で大男と兵隊が話をしていた。兵隊が立ち去ると、三人の男女がその大男の前に現れ、話を始める

「…お館様、そろそろ動くときは」

「まあそう急ぐな、木山田。お前がどうこうしたところであの烈火と言う男には勝てまい？」

「…確かに」

「ねーねー、なら私にやらせてくれない？あの男には借りもあるし…倒した後の美酒はうまいだろうしねえ！？」

「馬鹿者。勝てるわけなからうが。お前が10人居ても無駄だろう」「なら誰が出る、お館？…俺に出ると？」

「まあそう急かすな、分隊を派遣しろ。とりあえず相手の戦力を見る」

「烈火が出なかったら？」

「それならそれでもいいと思うがな。愛の巫女を捕らえようとすれば烈火の精神を逆撫でするだけだ。怒りに身を任せた時の烈火の力は見てるだろう？ 木山田、御酒？」

「…ふん」

「確かにそうだけれど…」

木山田と言う忍びの格好をした男と御酒と言う酒を片手に持つ女が大男に確信を突かれ黙る。だがもう一人の男がさらに話を続ける

「じゃあ今回の分隊派遣の目的は魔石の回収、および敵戦力の把握でいいんだな？」

この男の発言に大男の口元が緩む

「おお。指揮はお前に任せる。深追いは厳禁だぞ」

「任された」

そして三人は消え、任された男がその場に残る。その男に不敵に笑いながら、その場をゆつきり後にする

「…ククツ…クハハハハッ…！天上、地下、牙獣を制圧した力…俺が封じる！」

「新組織」

その頃瑠奈は新組織の郊外の地域まで散歩がてら足を運んでいた

「…ったく…なんでこんなもんを…」

目的はイフからもらったブレスレッドについてる石の力を確かめるためだった

「…起陣”！！」

そして魔方阵を呼び出し…

「…フレイム”！！」

炎の力を覚醒させた。いつも以上の火力に瑠奈は若干動揺しているが、すぐに扱いになれ、刀に炎を集めた

「…おい、イフ」

『なーんだい？』

刀から声が聞こえた。イフは守護霊のように瑠奈に寄り添っているのだ

「俺の元々の力が増幅されてるのか、これは？」

『そだね』違いう言い方をするなら、瑠奈の潜在能力を引き出してる、と言うべきかな？』

「元々これくらいの力を使える、って事か？」

『だけど瑠奈の能力には限界がある。だから今までは使えなかったんだよ』』

「…理解できなくは無いな」

するとそこに、あの男の軍隊が現れた

「…！」

「目標発見、攻撃開始」

その男たち三人が瑠奈に短刀で斬りかかる。瑠奈は刀を構える

『…試す良い機会だね！ちゃちゃっと焼き払っちゃって！』

「言われなくても！」

そして相手の隊列に飛び込み…

「自ら飛び込んでくるとは…」

「そういう戦い方だからな！」

そして刀を地面に突き立てた瞬間、そこから炎が渦を巻いて現れ、男たちを吹き飛ばした

『「」 焰竜・竜巻”！！”』

その巻き上がる炎が龍となり敵を吹き飛ばしたのだった。ただ一撃を放っただけなのに瑠奈は汗だくだった。この力を使う代償は非常に大きかったようだ

「なんだ、この疲労感…おいイフ！」

『まだまだ使い慣れてないんだから仕方ないよ』』

「…笑い事かよ…」

その姿を影から覗いていた人間が居たことを瑠奈は気付かなかった
：

7話：女神の力？

「新組織郊外」

「……まだ居たか……！」

『……意外と大勢居たもんだね……？』

瑠奈達は謎の男たちの襲撃を受け、撃退したかに見えたが、新組織に戻る最中、また謎の集団が後ろから迫ってくるのに気付いた。相手は炎、雷、水、風を拳にまとうていた。それを見た瑠奈は苦笑を浮かべながら刀を抜く

『ん？ここでドンパチやるの？』

「仕方ねえだろ？わざわざあいつらに救援を求めるつもりはねえ……」

『でも今の瑠奈じゃ、身体に負担が大きすぎるよ。ここは無茶をしない……』

「……使わなきゃいいんだろ？」

そついいそのまま突進する。相手は四人、瑠奈はまずは炎をまとう男に接近し、刀で斬り伏せた

「ごはあつ……」

「悪いな、容赦はしねえよ？」

「……貴様っ……」

次に雷と風の男が接近してくる。挟み撃ちを仕掛けてくるが瑠奈冷静に雷の男に仕掛けた

「……なっ……！？」

「寸劇だったな」

そして雷の男を斬る。後ろからは風の男が走ってきているが、瑠奈は落ち着いてその拳を防ぎ

「……止めたっ……！？」

「斬るっ……！」

そして風の男も斬り伏せた。最後に残ったのは水の男だった。その

男は拳を振り抜く。瑠奈はその拳を冷静にかわすが…

「！！？」

急に瑠奈は足元がふらつき、その場に転倒してしまった。男はそこに追撃をかけるがなんとかかわし、体勢を整える。瑠奈は大量の汗を流していた。その姿を見たイフは

『やっぱり無理してる…』

と核心をつく。だが瑠奈は一切そういう事は言わず、魔石の力を使う

「起陣、サンダー」！

そして雷の力を身にまとい、拳で相手の顔をえぐり吹き飛ばした。だが…

「げほっ！！」

瑠奈は吐血をし、その場に倒れた。そこにまた謎の集団が現れるが…

『ちよつと！！起きてっ！』

「…」

「憤怒の炎だな。…命をもらい受ける」

敵が刀を持ち、瑠奈に近寄る。するとイフが魔方陣を描き…

『仕方ない！！力を借りるとしようかなっ！！』

そついい瑠奈の身体に抱きつく。すると瑠奈の身体が光に包まれ、服装はそのままだが女の子になっていた。

「…烈火じゃ、ない？」

「んふふ」私は瑠奈だよ？ただ…身体だけねっ」

そついうとイフは手を前に広げる。そして…

「焼き払え！」業火灼熱”！！」

そして炎が敵を一瞬の内に飲み込み、辺り一面を燃やし尽くした。

イフは満足げに笑う

「にやはは、私の魔力をバカにしたらダメだよ？あんたらなんか、眼中にないんだから」

「やはり現れたか、女神」

するとそこにまた違う男が現れた。その男はマントで全身を覆っているため容姿は分からないが、声質から男だと言つのが分かった。

その男をイフは嫌な目付きで見つめる

「…誰あんた？私は女神なんて大層な人間じゃないよ」

「ふ…本人はそう思うだろうが、今この場を見てみる？お前の能力の強さが今、ここに現れている。それを見て女神と言わずどうする？」

「うざいな、そ…いうの…！私の前から消えてくれない？」

「いや、別にお前に喧嘩を売りに来たわけではない。どうだ？俺らのとこにこないか？」

ここでその男が変な提案をしていく。イフにはその言葉の意味が全然理解できなかった。不快感を露にしながらその男とはなしを進める
「はあ？意味分からな…い！軍勢って何？今この世界にそんなのがあるの？」

「さて、な？あまり深くは語る気は無い。ただ俺たちはその石が欲しいのさ」

男はイフの腕に巻かれた石を指差した

「俺たちはその力が欲しい。それを世のために使いたいのさ」

「ふ…ん？で？私は瑠奈と契約した。だからそっちなはいかな…い！」

イフはだからどうしたと全身で表現するかのように身を翻す。それを見た男は最後に

「…だったらその器を壊せば、お前は手に入るんだな？」
と言う。イフは少し笑いながら

「やれるならやってみれば？…あんたらが思うほど、瑠奈の器は小さくない、むしろ怖いくらい大きいんだから」

「…信用してるのだな？まあ、その信用を壊すのも一興か…」
そついい男はその場から姿を消した。イフは少し苛立ちを見せながらも

「ふふ…この世界はやっぱりおもしろいんだね…？…瑠奈？私をしっかりと守ってね？」

そついいイフは瑠奈に体を戻さぬまま新組織に歩みを進めていった…

「新組織、大広間」

「たっだいまー!!」

「……??」

新組織の大広間には瑠璃と風野が居たが、二人ともイフの姿を見てキョトンとしていた。何故なら瑠奈の服を来たイフが勢いよくドアを開けたからだ

「……あの……瑠奈さん……じゃないですよね?」

「ん? 違うよ? イフだよー」

「イフ……?」

風野はイフの存在をまだ知らなかった。その事を瑠璃から説明を受けると

「烈火……お前は本当にモテるな」

と恨めしそうにイフを見つめる。イフはなんの事か分からないため無視して話をすすめる

「今あたしは瑠奈から身体を借りてるの」

「なんでまた瑠奈さんの身体を借りることに?」

「ちよつと能力の酷使が身体に響いたようなんだよね? ちよつと意識を失っちゃったんだ」

「はあ!?! なんで能力をそんな……」

「まあ、色々あったんだよ」

「……だったら、早く身体を瑠奈さんに返してください」

瑠璃は少し怒った顔でイフに求める。イフは笑いながら快諾する。そして再び光に包まれ、瑠奈が現れる。既に瞳は閉じ、その場に倒れ込むような形で瑠璃にと風野に支えられた。

「烈火、おい、烈火!」

「瑠奈さん! しっかりしてください!」

「……」

瑠奈は顔色が悪く、口元は血で汚れていた。瑠璃は風野に指示を出し、瑠璃の部屋で看病をすることになった…

Ⅱ 新組織、瑠璃の部屋Ⅱ

「…」

「瑠奈さん…疲れがたまってるんですね…熱が高いですね…」

瑠璃は冷やしたタオルを瑠奈の頭の上にのせると、瑠奈のうでの魔石に目をやると、憂いの目に変わる

「…この石が、瑠奈さんを…」

『またまた、そーやって私のせいにするの？嫉妬？』

「！？」

瑠璃が驚きうしろを振り向くと、そこには初対面の時と同じ格好のイフが居た。イフは笑いながら瑠璃のとなりに座り、肩を抱く

『やっぱり良い子だね、瑠璃は』

「な、何がですか！？」

『こーやって寝ずに看病してるんでしょ？全く、献身的なんだから』

瑠璃は顔を赤くし、俯く

「瑠奈の今の原因はたぶん不馴れな力の行使による心身の負担の増大だよ。…まあ、瑠璃には悪いって思ってるよ？」

イフは急に瑠璃に頭を下げた。瑠璃はそれに戸惑い、手を横にふりながらそれをやめさせる

「べ、別に謝って欲しいとかじゃなくて…。あの、イフは…なんで瑠奈さんを選んだの？」

瑠璃は自分の中で一番疑問だった問題をイフに問いかける。するとイフは笑いながらこう答えた

『なんとなく、かな？』

その答えに瑠璃はすこしむっとしながらも、すぐに落ち着き会話を続ける

「瑠奈さんはやつぱり、貴女から見ても大分異質な人なんですか？」
『そだね〜、大分変かな？それを言うなら貴女も十分変だけどね？』

「それは、二重能力者だから？」

『いや、違うよ〜？なんて言うんだろ…他の能力者とは違う何か、貴女たちにはある…って感じ？』

「その…何か、とは？」

『それはちよつと私にも分かんないな…あ、もうダメかな？』

するとイフの身体が半透明になる。瑠璃はその姿を見て少し驚く

「…どうしたんですか？」

『あはは…私も少し力を使いすぎたかな？今日はもうダメみたい』

「…さつき、貴女達に何があったんですか？」

瑠璃が真剣な眼差しでイフに聞くが、イフはそれを言う前に消えてしまった。それを確認した瑠璃はまた視線を瑠奈に移す

「…瑠奈さん、今度は、私も貴方を守りたい…。だから…無理はないで下さいね…？」

そついい、瑠璃は瑠奈に覆い被さるように身体を預け、眠りについた…

〓新組織、門前〓

夜中、新組織の門前に女が一人佇んでいた。その女は髪が腰まで長く黒く、腰元には刀が、そしてその女の手には何かが握られていた…
「…ただいま、皆さん。…ただいま、お兄ちゃん！」

8話：帰還した戦乙女。そして、いざ決戦へ！

「新組織」

「…はっ！ま、また寝ちゃった…」

瑠璃は瑠奈の看病をしていた。瑠奈は能力の酷使により眠りについているようだが、瑠璃は瑠奈が明日に控えた重山との決戦があり、それを万全の状態を迎えてほしかったのだ。だが瑠璃も疲れて寝てしまっていた

「…とうとう明日…ですね…」

そこにドアのノック音が響いた。瑠璃がそれを確認し、ドアを開けると…そこには刀を持った髪の長い女の子が居た。…灼沢だった

「お久しぶりです、瑠璃さん」

「灼沢さん！？いつこっちに…」

灼沢はあの事件後特訓をすると行ってスラムの方にいったらしい。灼沢は瑠奈が後ろに寝てるのに気付き、瑠璃に対しジト目で睨み付ける。それに瑠璃は焦りを隠せなかった

「え、えと…あの…その…」

「…何があつたんですか？正直に話していただけますね？」

「あ、はい…実は…」

瑠璃は灼沢に瑠奈が魔石を手に入れ、潜在能力を呼び覚ましたこと、それが瑠奈に多大な負担を与えていること、それに明日は重山の妹との対決が控えていることを明かした。すると灼沢は少し悩んでいたが

「兄さんが自分でやったことなら文句は言えないね」

と笑って返した。どうやら灼沢は明日の戦いには出るべきと考えているようだ

「…でもさっきから起きないんですね…」

「あれ、そういう事なら聖澤さんが得意なんじゃ…」

「…あれ？　そういうえば聖をさっきから見掛けない…」

瑠璃の疑問はこれだ。瑠璃は夢村に召喚を見せると言う話をして、そこに聖澤が来て瑠奈を任せた。だが夢村がイフを召喚した時には瑠奈が一人で現れていた。だが瑠奈の外傷は大体消えていた。だがそれ以降聖澤は現れない。…これはいったいどういう事なのだろうか

「…ちよつと探してきます。瑠奈さんを…」

「はい、任されましたよ」

そついい瑠璃は瑠奈を灼沢に託し瑠璃はその場を後にした…

「新組織、時計台」

「…ん、後探してないのはここだけ…何処に行ったんだろ…」

瑠璃は新組織の中を探し回ったが聖澤は見つからず、とうとう新組織にある時計台に辿り着いた。そこに大鎌を肩に引つ提げた女が佇んでいた

「…聖？」

瑠璃はその女が聖澤であることは分かっていた。瑠璃が声をかけるとその女が振り替える。やはり聖澤だった

「…瑠璃？」

聖澤は驚いていた。瑠璃がこっちに来ると思っていなかったのだろつか

「何でこんな所に…まさかずっと？」

「来たのはさつき。瑠奈の件でちよつと考えることがあつてね…」
ため息をつく聖澤。どうやら瑠璃達と別れた後何かあつたらしい

「…何かあつた？」

「瑠奈の身体に異変が起きてる。…昔、能力の枯渇で瑠奈の身体が消えかかったことがあるじゃない？」

「それが…？　まさかまた？」

「いや、今回はむしろ逆。溢れてるのよ。濃度が濃すぎる」

「え？」

「瑠奈の身体がその濃度に耐えられるかが疑問ね？」聖澤は瑠奈の能力が瑠奈自身の許容範囲を越えてしまうと指摘している。だが瑠璃は先程瑠奈と居た際にもそのようなものが感じられず、ただ疑問でしかなかった

「で、でも私はさっきまで一緒に…でもそんな事は感じなかった…」

「瑠璃、もしかして貴女…力を貰われた？」

「…あ、あれ？」

瑠璃は力を解放しようとするが、何故か力は発動しなかった。瑠璃は頑張つて光を出そうとするが、手元に小さい光の珠を出すのが精一杯だった。瑠璃は動揺している

「…な、なんで…？」

「瑠奈の力は闇も入ってる。だとするとそれが影響してるのかも知れない…」

「…え！？だとすると瑠奈さんにも何か感じられても…！？」

だがここで瑠璃がはっと気付く。そういえば最近の瑠奈は召喚されたイフを宿している。そしてそのイフは夢村から瑠奈に移った

「…いや、だとすれば…」

「逆に重山妹と戦うのは好都合ね、放出出来るし…」

「…自分自身で出力を調整できるなら、ね？」

その言葉に聖澤も同意した。その頃…

「新組織、瑠璃の部屋」

瑠璃の部屋には灼沢、瑠奈が居た。だが、急に瑠奈の身体が光出すると、瑠奈が立ち上がり、イフに変わった。灼沢は呆然とイフを見る

「んにゅーう…まだ眠い…」

「…???誰？」

「あ、瑠奈の知り合い？初めまして…」イフリータです、イフって呼んでね？」

「?あゝ、ん？」

灼沢は混乱していた。目の前で寝ていた瑠奈が急に女性になって起き上がったからだ

「今私は瑠奈の身体を借りて貴女と話をしてるの、それは理解できる？」

「…そういう事が、脅かさないでよ…」

「私は炎の女神なのよ」

「…へ？」

「だから、貴女も炎の力の持ち主だっけすぐ分かったよ」

イフは一目見て灼沢が炎の能力者と見抜くと、灼沢の手をとる。すると灼沢の炎の力が勝手に解放された

「え、え！？」

「同じ能力者なら、力の解放の原理も同じ…だったらお安いご用なのさ」

「…」

イフは無邪気に笑う。その姿に灼沢は圧倒されていた

「まー、どの道瑠奈ももう目覚めるみたいだし、消えちゃうけどね」

「ま、待って！…貴女は、何者？」

そしてイフの身体が光始める。だがそこで一瞬灼沢の方に振り返り「炎の守護者だよ！」

そういい、また瑠奈の姿に戻った。瑠奈はベッドに戻されては居たが、今は目を覚ましていた。瑠奈は灼沢がいることに多少驚いていた「紗菜か？しばらく振りだな？」

「う、うん…」

灼沢は自分の力を勝手に解放させる瑠奈の中に居るイフの存在に少し恐怖を覚えるのだった…そして翌日…

「第一階層、ネイチャーガーデン・ロストキングダム」

「…約束の日、約束の場所、か」

瑠奈は单身ロストキングダムに乗り込んだ。いつもの刀を腰に携え、

既に力を解放していたが、まだ怪我だらけだった。そこにイフが語りかける

『ねーねー、その身体じゃ無茶じゃない？』

「うるせえ、黙ってる爆炎娘！これは俺があいつとかわした約束だ、約束は守らなきゃな」

『爆炎娘って何さー！そんなに暑苦しくないしっ！』

イフは爆炎娘って呼び方が気に入らないらしく瑠奈に文句をいうが、瑠奈は気にも留めず約束の場所に向かった。瑠奈にとって重山は負けられない相手なのだ。そして、決戦の場所につくと城内の反対側には既に重山が待ち構えていた。重山は明らかな嫌悪感を隠そうともせず、瑠奈に向かう

「逃げずに来たか、この人殺し」

「酷い言われようだな…、その口の聞き方、飛鳥にそっくりだよ」

「黙れ！お前にそんな事言われたくない！姉を殺したのはお前だ！お前がしっかりしてさえいれば…！」

重山は今にも飛びかかりそうな状態だが、瑠奈は落ち着いて重山と対峙する

「飛鳥が死んだことには詫びるが、飛鳥が居た場所ってのは強き者が生き延び、弱き者が死ぬ世界。飛鳥も覚悟はしていたはずだ」

「姉を侮辱するのか…姉は弱かったと…！」

この重山の発言に瑠奈はふっと笑い、刀に手をかける

「侮辱じゃない…お前と違って、潔いんだよ…！」

9 話：烈火 v s 重山、再び

「ロストキングダム」

「姉を愚弄する奴は許さないいつつ！」

「あいつは…あいつらしい最期を自ら選んだ…それは揺らがねえ！
妹であるお前が分かってやらねえでどうするっ！」

重山の拳と瑠奈の剣が互いに弾き合う。瑠奈の剣が重山の身体を捉えるかの所で重山は重力により刀の軌道を変えそれをかわし、重山が瑠奈目掛け拳を振るうがそれを瑠奈は刀で防ぐ…一進一退の攻防が始まっていた

「何が潔い最期だ…それが姉の運命だと言いたいのか！」

重山は怒りに任せた拳を撃つ事、そして瑠奈は未だ傷は癒えてないという事があり、瑠奈は重山の拳を防ぐ際にも若干のふらつきがある。その為か瑠奈は攻め手を欠いていた。その中重山の拳をいなし瑠奈は叫ぶ

「運命だとかそんな難しい話じゃない…これは人の意思だ！！飛鳥は瑠璃を守るために生涯命を注いでいた、それをあの時も体現したに過ぎない！！」

だがその様な叫びも怒りの感情に囚われた重山に届くわけがなく、重山の拳が瑠奈の腹を抉る。

「！！！」

「”勢重拳”！！！」

そして瑠奈の身体が壁に思いきり吹き飛ばされる。吐血し、瑠奈は満身創痍状態だった。そこにイフが語りかける

『ちよつとー、あんなやつに手加減なんかいららないよー！』

「っ…黙れ爆炎娘。俺はこうしなきゃ気が済まねえんだよ」

血を吐きながらもなんとか立ち上がる瑠奈に対し、重山は追い討ち

をかけるべく間合いを詰めてきた

「貴様に…貴様なんかに、姉の気持ちが分かってたまるかあああつ
！！」

そして重山は全力で瑠奈の顔面を殴り飛ばした。瑠奈は地面に叩きつけられ、刀は遠方に投げ出された

「…がつ…は…」

「…はあ…はあ…こんな貴様ごときを…姉さんが…なんで…何でええつ…！」

だがその一撃でも重山の怒りは収まらなかった。地面に叩きつけられ仰向けになつていた瑠奈にさらに拳を2発、3発と続けて叩き込んだ。瑠奈は顔面から、そして古傷から流血を起こし服は真っ赤になつていた。だがその時重山は涙を流したのだった

「……！？」

「…なんで、なんで姉さんはこんな男を好きになつたの？こんな弱くて、ズルい男を…」

「……！」

瑠奈は耳を疑った。飛鳥は瑠奈の事が好きだった、という事実が信じられなかった。重山は涙を流しながらさらに続ける

「斬馬を倒した後、一回姉さんはこっちに帰ってきた。その時の姉さんはとてもいい顔をした。私は不思議に思つて聞いてみたんだ。何かあつたのかつて。すると姉さんは笑いながら言つたんだ。『戦いの中でおもしろい奴と出会えたから』って」

「……」

「そしてその後天上軍との戦いがあつて、その後また一回帰つてきた。その時はお前は行方不明だった。姉さん、泣いてたんだ。『もう泣かないと決めてたけど、自分にとって大事な人を無くすのは、やっぱり泣けるな』って」

「……」

重山はさらに大粒の涙を流している。それだけ飛鳥を大事にしてたという事を瑠奈は霞む意識の中でもすぐに感じる事が出来た。重

山はさらに続ける

「そして…牙獣が現れる少し前、帰ってきたんだ。それが私に取って最期の姉さんだった。その時、姉さんは私にこう言って出ていった。『私は、大事な人達と戦う。一つは、瑠璃様。今までずっと守ってきた、雫と同じ妹のような存在。二つは、仲間。長い時間の中で、いろんな人たちと会えた、私にとっては大事な宝物。そして三つは…烈火瑠奈って男。あんなにもしくて、強くて、嫉妬できる奴が出来たのは初めて。瑠璃様が居るから言えなかったけど…雫？私、烈火瑠奈って男が、好き』って…」

「…」

瑠奈は重山の攻撃の手が止んだためある程度意識が回復していた。

瑠奈は飛鳥がそんな事を考えてるとは全く知らなかった

「…その男が、何で姉さんを守らなかったのか、私は理解できなかった。あれだけ姉さんが好きって思った相手なら、相手もそれくらいの気持ちがあったと思った。…だけど、お前は姉さんを見てなかった！死んだ後、お前は姉さんの存在を忘れたかのようなだった！だけど姉さんは人知れず恋をしていたんだ！お前にこの気持ちが分かるかああっ！」

そして重山はトドメの一撃を振り下ろす。だが瑠奈はその拳を手で掴み受け止めた。重山はその行動に焦りを隠せなかった

「は、離せっ…！」

「…お前の言いたい事は、それだけか？」

瑠奈の様子が変だった。まるで生気を失ったような目で重山を睨み付けていた

「…うつ…くっ…」

「…飛鳥の気持ちは…確かに申し訳なく思ってる…お前から見たら…俺は、飛鳥に酷いことをしたようにみえるだろう…だが…」

瑠奈の手にちからが入る。それと同時に力が解放され手が炎に包まれる。重山は熱さに苦しめられる

「…！！うあああっ！」

「俺だつて…あいつが死んだのはつらい！皆だつてそうだ！瑠璃なんか特に我慢してるんだ！組織に幽閉されるようになってからずっと重山が傍に居たんだぞ！俺だつて大分お世話になった！そんな奴が居なくなつてつらくないわけが…ねえだろおおっ！」

そして心の悲しみを全てぶつけるように瑠奈の拳が雫の顔面を捉えた。雫は瑠奈により吹き飛ばされ、地面に転がった。下顎を殴られたため目の前がクラクラしてるようだった

「あうああっ！」

「…そんだけ飛鳥の事を知つて…なんで分かつてやらない…この状況が、飛鳥が喜ぶのかよ？飛鳥は俺とお前が戦う事を望んでるのかよ？」

瑠奈はゆっくり立ち上がる。ただ意識はまだ完全ではなく気力で立ち上がつてるようだった。目は額からの流血により完全に潰され、身体中からも流血していた

「…」

「教えてやるよ、お前に…俺が受けた、悲しみを…！」

そして炎をまとった拳を重山に対して撃ち落とそうとした、その時だった

「は…い、そこまで♪」

「…！」

「！？？？」

不意に上の方から声がしたため瑠奈が見上げると、城の上階に女の影があつた。瑠奈はその女に見覚えがあつた

「…御酒か」

「そうよ、覚えててくれたのね、坊や♪」

御酒は挑発するように瑠奈に話しかける。瑠奈は気にしないように話を続ける。瑠奈が少し目を周りに向けると、機械兵が周りを囲んでいることに気付いた

「…何しに来た」

「そうねえ…漁夫の利を得に来た、と言えばいいかしら？」

「漁夫の…利？」

重山もふらつきながら立ち上がる

「そう、貴方達二人が戦えばどちらかは戦力外、もう一人も手負いの身。そこに私たちが畳み掛けて、二人の命を奪えば…てね」

「…貴様の思惑通りか」

「そうね、重山の妹がここまで善戦するとは思わなかったけど…良い誤算ね」

「…私は…甘く見られたものだな」

「所詮貴女は小物。私の狙いは烈火の命だけよ？」

「…下衆が」

瑠奈が吐き捨てるようにいうが、状況は最悪だった。意識を保つので精一杯の身体、刀はどこにあるか分からず、重山も手負이었다。御酒は勝ちを確信したように高笑いした

「オーホッホッホ！最強の戦士、烈火瑠奈もここで終わりよ？騙し討ちでも何でも貴方が死ねば万事OKなんだから♪」

そして周りを囲んでいた機械兵士達が武器を取る。瑠奈達は絶体絶命の窮地にたたされた…

10話…亡き友に捧ぐ、弔いの炎

「ロストキャッスル」

瑠奈と重山の決戦の最中、御酒が機械兵を率い、二人を包囲した。二人は戦いによりダメージが深刻により劣勢になるのは免れなかった。御酒は勝ち誇ったように瑠奈に叫ぶ

「無様だな烈火あ！いくらお前でも女には全力はだせないのか？」

「…お前には全力を出したつもりだが？」

瑠奈は以前、御酒と地下闘技大会で一戦をしているが、その場では瑠奈の力の暴走があつたが御酒は圧倒されていた。御酒は少し冷や汗をかいていたが、それを隠すように瑠奈を嘲笑う

「あときはあするとき、今は今よ。騙し討ちにはなるけど、これは殺しあいなの。悪く思わないでね！？…行け！」

そして御酒は機械兵に指示を出すと、周りに居た機械兵が瑠奈と重山に接近する。重山と瑠奈は背中合わせに立つ

「…何を言いたいか、分かるな？」

「分かりたくない」

「文句を言つな、今この状況で個別で勝てるかよ？」

るなと重山はこの場に及んで喧嘩を始めた。その二人にさらに機械兵が近づく

「…飛鳥と同様に強情だな、お前」

「黙れ烈火！！貴様が姉を愚弄するのは許さん！！」

「目の敵にされる意味はいまだに分からねえが…このままじゃ決着はつけられねえ」

「シネッ！！」

その場の重山と烈火に機械兵が向かい剣を振り下ろす。だがここで重山と烈火の怒りが頂点に達した

「「うるせえええつつ！！！」」

そして機械兵に対し、重山は拳で機械兵を粉碎、瑠奈は刀で切り落とした。その様に御酒が狼狽する

「んな、んななあっ！？」

「邪魔だ」

重山は重力の力を解放し、重力を力に変えていた

「…悪いな、御酒。こんな機械兵ごときで俺は止まらない。…起陣」

瑠奈は地面に魔方陣を産み出し魔石の力を解放し、炎の力を増幅した。イフはそれを確認し、瑠奈に語りかける

『烈火、今のお前の身体の状態じゃ多分もたない、それでも使うの？』

「…」

イフは瑠奈が気にしている事を言った。瑠奈の怪我也軽くはなく、重山との戦いで消費していたのだから。だがイフの心配をよそに瑠奈は笑い、答える

「少しくらい能力が枯渇しても構わない。イフ、悪いが俺の力を…」

『はいはい、わーっただよー！！かいほーうー！！』

そして瑠奈の身体から能力がさらに溢れる

「…この力…前の時の比じゃ…」

「”グラビティ・フィスト”！！」

御酒が瑠奈に気をとられてるうちに重山が機械兵を掃討にかかる。

そして御酒への道が開け、重山が瑠奈に檄を飛ばす

「行けよ貴様あつ！！力をしめせっ！」

その道を瑠奈が一気に駆け抜け、御酒の場所にたどり着いた矢先に瑠奈が刀を抜こうとしたが御酒は一步早く銃口を瑠奈の額に突きつけた、そして二人の動きが止まる

「んくく…貴様もここを撃ち抜かれたら死ぬよなあ？」

「…」

「死ねえ！」

そして銃が放たれるが、その瞬間瑠奈は消えた。陽炎だったのだ。

そして当の瑠奈は…

「おおおおおっ！！」

「！？何っ！？」

瑠奈は上空だった。大きな炎弾となって御酒に一直線だったのだ

「くたばれええっ！」

「そ、そんな…うわああああっ！」

そしてその炎弾は御酒を飲み込み爆発した。そして煙が晴れるとそこには瑠奈の姿があった。そこに機械兵を倒した重山が歩み寄る

「…これが、お前の力か…」

「…」

瑠奈の反応が無い、そこに違和感を覚えた重山は瑠奈の正面に立つ
「おい貴様、無視とはいいいい…、！？」

だがそこで重山は気付いた。瑠奈の目が真っ赤で、苦しんでいた。
そして…

「…ああああああああっ！！！」

その場で叫ぶと、倒れ身体を擦るようにして苦しみだした

「熱い…身体がっ…燃えるように…っ！！があっ…ああああああっ…

！」

「…っ！何が…どうなって…」

「やれやれ、間に合わなかった…」

そこに聖澤、灼沢、大門が現れた。重山は三人を見渡し、真剣な眼差しで三人に聞く

「…今のこいつに、何が起きてるのか分かるのか」

「さてね、私には分からないけど…非常にまずい状態であると言うことはたしかね」

聖澤が重山と話す間、灼沢は急いで瑠奈の所に歩みより、大門が作った門に瑠奈と共に入っていった。門の行き先は当然新組織であろう

「…」

「貴女も感じたでしょう？あの男の強さを」

「…ああ、恐ろしかった。あれほどの力を軽く引き出している…私

じゃ、絶対に勝てないって位にね」

「そう、彼は強い。今地下に居る能力者1と言ってもいい位にね。でも、それ故に彼は諸刃の剣…丁寧に扱わなきゃすぐ壊れる…」

「今が…その瀬戸際だと、アンタは言いたいのか」

「重山の妹さん？強さは…脆さと隣り合わせなの。彼はそれを知ってる。なのに彼は自分の力を最大限に使った。これは何故だと思う？」

聖澤の質問に重山は眉を潜め、顎に手を当てて少し考えた、そして出た答えは

「…姉の、為？」

「そうよ、瑠奈は貴女の姉の為に力を使った。貴女の姉は、まだ貴女にこの世界で生きてほしい、そう願ってる筈だって思ってたね」

「…姉は、生きてくても生きれなかった。まさかそれを…アイツは負い目に？」「かも知れないわね。自分自身に力があればお姉さんを守れたかも知れないって」

「…」

「それでも貴女は、烈火はお姉さんを見殺しにしたと思うの？」

「…いや」

重山は神妙な面持ちで聖澤に否定する。烈火に対する誤解は解けたようだ

「じゃ、ここからは私たちが撤退を援護よ？」

「…撤退？一体どういう…」

重山が辺りを見渡すと、先程倒した機械兵がまた動きだし、辺りを包囲していた。どうやらコアを破壊しないと再起動するようだ。聖澤は大鎌を構え、口許を緩ませる

「じゃ…久々に大暴れさせてもらおうかしら？」

「…二人でやるのか？」

「いや、まだ居るよ。なあ？…零！」

すると上空から銃撃が起きる。その方向を重山が振り向くとそこに氷の翼をはためかせた零が居た

「…全く、人使いが荒いな」

「うるさいわね零。文句言わないで手伝いなさい！」

「…貴方は…氷の…」

「零冬児、姉から話をきいてるか？」

「…凍てつき銃撃手、とね」

「ふん、まあ構わんが…まだ居るぞ」

「だらつしやあああああつ！！」

「”疾風閃”！！」

さらに横から葉っぱの矢が飛んできて機械兵を穿ち、そこに男が飛び込み拳を機械兵にぶちこみ吹き飛ばした

「…風に、木の…守護者か??」

現れたのは双葉、風野だった。二人はすぐに重山の傍に向かった

「こいつが飛鳥の妹か、聖？」

「そ、似てるでしょ？」

「…慣れ慣れ…」

「あー、言うな言うな！俺は元々こんなだからな！！」

「貴女が重山の妹ですね？私は双葉、忍びに生きる木の能力者」

「…忍…、貴女達は…なんて言う集団…」

重山があっけに取られる中、聖澤が笑顔で答える

「私たちは…そうね、物好きなお人好しの首長を持つ…物好きな存在かしら？」

そして機械兵に向けて各人が攻撃を開始する。重山は少し出遅れるがすぐに拳に重力の力を固め、突撃を始めた

「…戦い終わったら、新組織、行ってみるか！行きますつつつ！」

〓 新組織 〓

「道を開けてください！！兄さんの状態がまずいんです！」

「悪いが手が空いてる人は瑠奈の手当てと、瑠璃様をよんできてく

れ！迅速に頼むツスよお！」

大門と灼沢は瑠奈を肩で担いで救護室に急いでいた。瑠奈は未だに身体中が熱いらしく、冷や汗をかきながら苦しんでいた

「うう…ああっ！」

「に、兄さん！もう少し、もう少しだから！」

「こ、ここツスね！」

そして大門が救護室のドアを開けるとそこにすぐ瑠奈を寝かせる。

灼沢はタオルを濡らし、すぐ瑠奈の額に乗せた。瑠奈は荒い吐息を漏らしながら悶え苦しんでいた

「ど、どうしよう…兄さん！兄さん！！」

「正直俺たちじゃ手に負えないツス…瑠璃様は！？」

「何事ですか！！」

そこに瑠璃がやって来た。瑠璃は部屋に瑠奈が苦しんでると、灼沢たちの慌てぶりで状況を判断し、すぐに瑠奈の元に駆け寄る

「あああっ…熱い…熱いいいいっ！」

「…灼沢さん、大門さん。重山は？」

「え、えと、今は所属不明の機械兵と戦闘中との事です！そこに私たち新組織の戦力も居ます！」

「灼沢さん、慌てなくてもいいですから、かしこまらないで下さい？」

「は、はいっ！！」

灼沢は深々とおじぎをする。それに合わせ大門もおじぎをし、それを見た瑠璃が苦笑する。だがすぐに表情は暗くなり

「二人とも、そちらの援軍に行ってください。そして片がついたらその場に居る全員に新組織に来るように伝えてください。…お願いできますか？」

「…わ、分かりましたツス！瑠璃様の指令は絶対遂行するツス！」

「わ、わわわ私も頑張るっ！」

そして大門と灼沢はその場を急いで後にした。そこには苦しむ瑠奈と瑠璃の二人が残される。瑠璃は瑠奈の手を握りながら涙を流して

いた

「…瑠奈さん…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「熱い…焼ける…あああああっ!!」

瑠奈のこの状況は果たして何が原因なのか…そして謎の機械兵は何者なのか、御酒の目的は…？

10話…亡き友に捧ぐ、弔いの炎（後書き）

「ちよいちよーいっ！ー！どーして私の本編の出番が激減してるのおっ！？？…あっ！皆さんお久しぶりです、日向だよ、今回はサブストーリーなの、だからその予告をしに来たんだけど…こんな美少女を予告に使うなんて、筆者も贅沢よね？…え？読者には君の容姿は分からない？うるさいわね…それは読者の想像にお任せ、それでいいじゃない！あ、話が脱線しちゃったけど、サブストーリーの話ね！今回は一期の最終話のあとがきにあつた『地下野球大会』の話よ！瑠奈達は瑠璃の願いを叶えるため野球大会に出場することになったんだけど、皆素人ばかり。果たして瑠奈達は試合に勝てるのかな？って言う感じよ？その次はすぐに本編に入るから楽しみにしてて、そのころには多分私も出るから、期待しててね、じゃ、次行ってみよ。」

『サブストーリー…駄弁る、その1』

この話は基本会話のみです。読者の妄想を働かせて、楽しんでください。

テーブルを囲み、とある男女四人がお茶会（という名のグダリ）を開いていた

「…なんで俺がこの輪に入ってたんだ？」

俺、烈火瑠奈はケーキを食べながらそんな事を呟く。…うん、うまい「良いじゃない？ 時には変わったメンバーで話すのも重要よ？」

左隣に居るのは…聖澤聖。…瑠璃じゃねえのかよ

「…私の本編での出番は、今まだ無いのに…」

右隣は泉野弥枝。…確かに最近はこの扱いがずさんだよな、著者よ

「…最後の一人が、私つてのもまたなんか不思議ね？」

そして正面には夢村未来。夢村は俺にウィンクしながら微笑みかけてきた。…なんなんだよ、この面子

「あら烈火君？ 本当に不満なの？」

「そーいう訳じゃあないが…なんだってこの面子なのか謎なんだよ」

「…特に私、だよな。瑠奈？」

「別にお前だけじゃねえよ。聖澤も夢村も、俺からしたら謎だ」

「私も同意見だ。私じゃなく瑠璃がこっちに来れば良かっただろうに…まだ別の場所と同じような事をやってるらしいな…、お、このケーキおいしいな…」

「あら、聖さんがそんな事いうとは思わなかったわね…今回は灼沢さんと日向さんの共同作業で作ったらしいわよ？」

「…香恋も、二期では出番が…」

「まーまー、泉野さんも日向さんも、これから出番ありますよ？…」

きつと」

「夢村、それは慰めてるのか？」

「あら、聖さんには慰めに聞こえなかったのかしら…困ったわねえ」

「…あー、そろそろこの雑談会の意味を聞かせてくれねえか？」

ダメだ、この雑談会じゃ俺の存在感が薄れる。早く話を本題に聞かなければ…

「ないよ」

「…ない」

「ないわね？」

オイ

「ちよつと待て、意味が無いわけないだろ？」

「だから、無いって。…強いていうなら、不思議なグループを筆者は作りたかつたんじゃないかしら？」

「…筆者は私に、出番をくれたんだと思う…」

「ん…、これは烈火君との恋愛フラグかしらね？」

三人が各々に自由に話をしてる。…ああ、最近の面子（瑠璃、灼沢、風野、有音）の方が話しやすいつてのが今回思い知らされたな

「…作者も余計なことしてくれるぜ、全く…」

「あら、そうかしらね？」

「？はあ？」

夢村、聖澤、泉野は知らぬ間に話すのを止め、こっちに微笑みかけていた。…な、なんだよ、何なんだよ…

「…考えてることは、同じ」

「そうみたいだね。…聞いてみようか？」

「うふふ…烈火君、覚悟はいいわね？」

「な、何だ…？」

「…この三人の中で、一番好きな子は誰？」

「何いつ！？？」

吹いた、吹いたよ。さすがにそんなことをいうとは思わなかった。つうか、そんな事考えた事ねえな

「さあ、誰？」

「…瑠奈、正直に」

「ふふ…楽しみね？」

「…うう…」

容姿の好みは夢村かな。大人な女であつて、どこか謎なオーラがあつて…。だけど内面なら泉野、聖澤も捨てられない。泉野は寡黙ながら思いやりがあるし、聖澤も仲間にたいしての想いは熱いものがある。…ん…

「それって優劣つけなきゃダメなのか？」

「…駄目」「…」

はい、拒否されました。…くそ、しゃあねえか

「…この三人なら、夢村かな？」

「…そ」

「…瑠奈、大人が好きなんだ…」

聖澤と泉野が何故か肩を下ろしている。…え？

「ふふ…そう、私なのね…意外だわ？」

そう良いながらも、夢村はまんざらでも無さそうだ

「…そんなところで、この話を終わりますしょうか？」

…え、終わり！？

「じゃ…今日のお茶会…」

「…おしまいっ」「…」

皆が目元でピースをする。…終わるかよっ！！

11話…理解

「ロストキャッスル」

「これで…ラストおおつ！！”撃拳”！！」

そのころ重山達はロストキャッスルに居た機械兵を掃討し終わった所だった。全員が能力を消し、重山の元に集まった

「…落ち着いたところで、重山の妹さんに改めて自己紹介しようか？俺は風野真人。風の守護者で今は新組織に所属だな」

まずは風野が重山に握手を求めた。重山も礼儀が分かっているように握手を返した

「…私の名前は双葉陽子。木の守護者。新組織の忍よ」

「…零、冬児。氷の守護者」

続いて双葉、零と握手をする。そして次は聖澤だが…ここで聖澤に対し重山は意外な行動を取る

「私は聖澤聖、私も…」

「違う、貴女は違う」

そういうと、重山は聖澤に対し拳を突き出した。だがその拳は殴るためでは無く、聖澤に敬意を表すためだった。聖澤の顔の前で止まった拳に、聖澤はその手を握った

「…私に敬意を示して何になるの？」

「姉は貴女の妹、光瑠璃に仕えていた。その様に私は貴女に仕えた
い」

「…ふん…私はそんなに大層な人間でも無いのに…」

聖澤は少し複雑な表情を浮かべていた。聖澤は落ちこぼれの瑠璃が地下で選ばれたことを昔は気にしていたからだ。そこで聖澤は

「…だったら、今ここで少し試してみる？貴女が勝ったなら仕えたらいいわ。だが私が勝ったなら私に仕えるのはやめなさいな？」

「…いいでしょう」

そしてその場で重山と聖澤は武器を構えた

「…おいおい聖…、マジでやるのか？」

「あら、私は嘘は苦手よ？」

「…行くぞっ！」

そして重山が一気に間合いを詰め、拳を叩き込む。聖澤は鎌を使い攻撃を防いだが、重力の力で少し吹き飛ばされる

「…！？」

「私の力…簡単には破れない！」

「…かしら？」

だが聖澤も力の出し惜しみはしなかった。白い翼をまとい、鎌を構え空から強襲にかかる。その鎌の一撃をかるうじて重山は受け止めるが…

「…かかった」

「…！！」

そこに光が集まった瞬間、重山の身体を切り裂いた

「…っっ！！」

「…“光刃翼”…今を見抜けないならまだまだだね？」

「…うぐっ…ま…まだ…」

「今はそれどころじゃない！」

重山が再び立ち上がろうとしたところで、灼沢が剣幕で戻ってきた

「…まずいのか、灼沢」

「零さん、その通り。兄さんの容態が危険なんです」

「…原因は分かっているの？」

「詳しいことは、まだ…。ですが、熱いという言葉を連呼している辺り…」

「あいつの力、炎の暴走…か？」

「はい。そして…瑠璃さんから招集命令が来たよ。地下の勇士達に来てほしいって」

そして灼沢は事前に瑠璃に渡された名前を読み上げていく

「風野真人、零冬児、双葉陽子、灼沢紗菜、天鳳院琉季、有音渚、明源愛、夢村未来、聖澤聖、天導誘貴、大門斗真、そして…重山雫。以上を地下代表、光瑠璃の名の元に呼び集める。…だそうです」

重山は驚いていた。自分自身の名がそこにあったからだ

「…では、行きますよ皆さん！新組織へ！」

そして重山達は大門が産み出した門をくぐり、新組織へ急ぐのだった

「新組織、瑠璃の部屋」

「…」

「大分落ち着いた見たいですね…ふう…」

その頃、瑠璃は未だに瑠奈の看病を続けていた。その看病が功を奏したか、瑠奈の容態が次第に安定してきたが、未だに意識ははっきりしていないようだった。その部屋に夢村が来る

「夢村さんですか…」

「どう、瑠璃ちゃん？烈火は少しはよくなった？」

夢村は瑠璃に気を使いながら接しているのが丸分かりだった。瑠璃もそれに気付いていて、気丈に接している

「…はい、先程からは苦しまなくなりました」

「そっか…なら大分良くなってるのかな…？」

「それはまだ何とも…とりあえず、瑠奈さんの力が未だに放出されっぱなしなのが心配です」

瑠奈は能力が解放されたままだった。瑠璃はこの状態が危険に繋がっているのは分かつては居るが、対処が分からず困っていた

「とにかく、今度は私が看てるから、瑠璃ちゃんは少し休んだら？寝てないんですよ？」

瑠奈が倒れてから丸一日が経とうとしていたが、瑠璃は不休で看病をしていたのだ。瑠璃は苦笑を溢しながらも

「では…お言葉に甘えて…」そういい、自分のベッドに横になった。その状態で夢村は話を続ける

「烈火って真面目よね。誰の為に命張って、正義を気取らないけど、何だかんだ正義感強くて、困ってる人が居たら、何だかんだ断れなくて…」

「でも、それが瑠奈さんの…」

「いいところなんだけど、瑠奈は自分の負担を無視して行動するから、寿命削ってるよね？」

「あ、…確かにそうですね？」

「まー、それもまた瑠奈らしいんだろうけどさ？瑠璃ちゃんの事を考えたら瑠璃ちゃんが可哀想で可哀想で…」

夢村が泣き真似を交えながら話を続けている。瑠璃はそれを苦笑を浮かべながら聞き続けていた

「烈火は、瑠璃ちゃんの為に剣を取ってる。でも私から見たら、烈火は」

「命を捨ててるようにしか見えないよね、どうも」

「…！」

不意にこえがしたかと思ひ瑠璃は後ろを向くとそこにコーヒーカープを持った天導が居た

「あ、貴方…なんでここに！？」

「あれ…困ったね、どうも…。ここら辺で能力が放出されてるのが感知出来た…が、表の理由かな？」

瑠璃の質問に天導は含んだ言い方で答える。それに苛立ちを覚えた夢村が食いつく

「あら、でも貴方には関係ないんじゃないかしらね？」

「ふっ…確かにそうだ。君…夢村さんの言い分はもつともだよ。だけれどいずれ私も呼ばれるのであろう？瑠璃？」

「っつ」

瑠璃は凶星だったようで天導からめを背ける。夢村は少し驚いていた

「じゃ、ここに来るのは…」

「運命、とでも言おうかね、どうも…」

そして会話が終わり、天導が切り出す

「とりあえず、機械兵の掃討は完了、全員帰還したようだよ、瑠璃」
「…では、皆さんを会議室に集めてください。これからについて…話をします」

瑠璃の目は覚悟を映していた…

12話…それぞれの始まり

「新組織、会議室」

「…わぁ…皆さん…」

瑠璃が会議室に入ると、瑠璃の知人ではあるが沢山の能力者が顔を連ねていた。瑠璃はその輪に入り、会話を始める

「灼沢さんに、風野さん、有音さん。ご苦労様です」

「あぁ…俺にとっちゃあんな仕事、取るに足らねえよ」

「私も平気…だって兄さんの為だから！」

「私は真人に力を貸してただけだから…そ、その…何も…」

「とりあえず、ご苦労様です」貴殿方が頑張ってくれたお陰で、戦力が整いそうです！」

「？戦力って…」

瑠璃は灼沢の言葉を遮り、壇上に立つ。そしてその場に居る能力者達に語りかけ始めた

「…えゝ、皆さん。私の呼び掛けに集まって頂き、ありがとうございます。いましたゝ皆さんの知っている通り、今地上、地下共に復興の一途を辿っています！」

「…堅苦しい挨拶はよそうぜ、光！さっさと本題入ろうぜえ！」

この会議に風野が茶々を入れるが、有音に怒られ引き下がる

「…ですが、今回の一件もそうですが、最近その平和に陰りが出てきました。そこで…」

そして瑠璃が力を込め、本題を切り出した

「今回集まっていたいた皆さんに、新組織の防衛、今回の事件について検証、地上、および地下で起きた事件の解決、事件の根元の解決をチームを組んでやっていきたいと思いますが…皆さん、いかがですか？」

瑠璃は今回の事件を重く捉え、皆にこれを解決するために助力を求めたのだ。そして瑠璃はそのまま重山零の前に立つ。重山は何が起きるか分からず焦っていたが、瑠璃は重山に握手を求めた

「重山零…さんですね？私は光瑠璃です」

「…光…」

「貴女の姉…飛鳥にはとてもお世話になりました。そして…飛鳥を死に至らしめたのは、私の力不足が原因でもあります」

「…」

「でも…私はそんな貴女に期待します。それと…私は飛鳥への恩返しのために、貴女を守っていきたい」

そして重山の手を取る瑠璃。重山は気恥ずかしいのか目線を逸らしていた

「重山さん…力を貸してくださいますか？」

「…あ、ああ…うん」

そして重山の了承を得、瑠璃は隊の編成を始めた

「まず、今回の件の調査を零さん、明源さん、双葉さんをお願いしたいと思います」

「…仕方ない、か」

「おにーちゃん…やる気出せよう」

「私は零殿と明源殿がペアか、よろしく頼む」

「地上での事件の解決は灼沢さん、聖澤さんがいてください」

「…え？また変なペアだね？」

「そして申し訳ありませんが、地上は日向さん、泉野さんと合流して事を運んで頂けますか？」

「ん…まあ、仕方ないか」

「地下の事件について風野さん、有音さん、天鳳院さんが当たってください」

「また戦力を分散させたもんだなあ…」

「ぶつくさ言わないの、真人。手一杯なのよ？」

「あー…分かってるよ、渚」

「そして新組織の防衛はここに居る兵隊さんと…夢村さん、瑠奈さん、重山さんをお願いします。…では、各員の奮闘を、期待します！解散！」

そして各々が移動を開始し、場が静かになったところで夢村が瑠璃に話を切り出す

「…瑠璃ちゃん、正気？今の瑠奈を戦力に加えるなんて…」

「その質問には、本人が答えますよ？」

瑠璃が1つため息をつき、後ろを指差す。夢村が振り替えるとそこには瑠奈が立っていた。まだ体調は回復してないらしく顔色が悪かった

「…あんた…」

「こー言うことだ夢村…俺も…出るぜ」

「んな事言ったって、今の貴方じゃ…」

「分かってる…けどな…自分の能力で死ぬくらいなら、なんとか瑠璃達の力になってから死にたいんでな…」

「だ、そうですよ、夢村さん。…私が言っても止まらないです」

瑠璃の言う通り、瑠奈の目は疲労から濁ってはいたが覚悟が見えていた。夢村もそれのため息を吐き

「仕方ないわね…まあ、重山さんも居るでしょうから、なんとかするでしょう？」

「…でも瑠奈さん？とりあえず後3日は静養してください。良いですね？」

「…確かに俺も、すぐには…動けねえよ」

「それが良いだろうな。貴様が死ぬと姉さんが浮かばれないからな」

「とりあえず当分は烈火君と新組織の護衛ね」

「はい。夢村さん、重山さん、瑠奈さん…。よろしく、お願いしますっ！」

瑠璃は三人に対し深々とおじぎをした。それに対し三人は笑って返したのだった…

「新組織、正門前」

零、有音、双葉の3人は新組織正門前には事件の調査の為、決意を口にしていた

「…」

「おにーちゃん…まだ不機嫌なの？地下の為にがんばろーよう…」

「大丈夫ですよ、明源殿。こうみえても零殿はちゃんと依頼をこなす人です」

「…双葉」

「お互い共通の仕事です。頑張りましょう？」

「…仕方ない、か」

「がんばろーっ！」

「地上へと続く門前」

灼沢、聖澤、天導は大門の所に赴き、大門が生み出した門に行く準備をしていた

「私は地上組…久しぶりに日向さんと泉野さんにも会えるんだあ…」

「灼沢。悪いけど再会をよろこぶ事は無理そうだよ」

「ふ…聖。固くなるなよ。灼沢さんには楽しみなんだからな」

「…早く終わらせて、早く兄さんの所に向かうんだ…！」

「昇降エレベーター前」

昇降エレベーター前には風野、有音、天鳳院が準備を終え、一時の談笑をしていた

「…これでよし、と」

「真人？何を用意して…」

「マンガ肉に、籠手、爪、木刀、マイクかな？」

「ま、マンガ肉？な、何のために…」

「あいつの為だよ」

風野が指を指した先にはマンガ肉（絵で書くような骨付き肉である）

にかぶりつく天鳳院が居た。天鳳院の顔は綻んでいてとても幸せそうだった。名を呼ばれ、笑いながら振り替える

「…ん？どした、風野？」

「…幸せそうだなあ…天さん」

「うん、幸せ。風野、食べるか？」

「要らね」

「じゃあ、有音は？」

「わ、私…、す、少しもらって…いいですか？」

「ん、食べな。」

そうしてマンガ肉をもらう有音。それを頬張ると、有音の口も綻んだ

「お、おいしい…」

「マンガ肉は、一番、おいしい。有音、分かってくれた？」

「…おーい、天さんに渚？そろそろ出発するぜ！」

こうして4つに部隊を分け、瑠璃達地下の住人が新たな敵に向かい始めるのだった…

〓新組織〓

「ゼエ、ゼエ…。熱い…くそ…」

「ねえ…早く休まなきゃ。今の瑠奈じゃあもたないよ…力に飲み込まれるよ？」

「うるせえよ…ゼエ…ゼエ…。俺の身体なんだ…、少しは自由に使わせやがれ…」

「そんな事言っても…」

「それより…、イフ、お前は狙われてるのか？」

「…分かってるんだね、瑠奈には…参ったなあ」

「俺が雷の力を使ったとき、お前以外の精霊が…出なかったのな。大方そいつら…捕まってるんだろ…？」

「あら、そこまで？…もう、さすがは瑠奈だなあ…。うん、そうだ

よ。私と同じ能力の精霊達は皆、敵に捕まってる』

「残りの1つを手に入れた俺は自然と狙われる…、それくらい分かってたさ」

『…ねえ、瑠奈。皆を…助けてくんないかな…？』

「言われずとも…やってやるさ…ゲホッ！」

『…!!吐血…』

「…ちっ…少し、部屋で…寝るか…」

13話…防衛戦

地下組織で再び隊が組織され、ロストキャッスルにて襲撃を行ってきた機械兵の軍団に対する処置を行い始めた。瑠奈、重山、瑠璃、夢村の4人は新組織に残り、機械兵の襲撃に備えていた。ただ瑠奈、重山は手負いの身、瑠璃は力を何らかの理由で使えない状態だった…

「新組織、救護室」

「…」

「やはり無理が祟ったようね…」

瑠璃、夢村は救護室で眠る瑠奈の看病をしていた。会議後瑠奈が通路で倒れていたのを聞かされた夢村達が運んできたのだ

「…申し訳ありません、夢村さん」

「いやいや、瑠璃ちゃんが謝る場面じゃないわよ？むしろ烈火が無理をしすぎなのを責めたいわね…」

「…」

「正直な所、この戦力状況じゃ新組織は制圧されるわよ？うちの部隊の力は能力者には到底及ばない、当然機械兵にも…」

「でも、これくらい戦力を分散する位の警戒は必要だと思ってます」

「…何か、心当たりでも？」

夢村が怪訝そうに瑠璃に聞くが、瑠璃はうつむきながら首を横に振るだけだった

「…やっぱり、戦力をもう少し集中すべきだったんじゃない？」

「んな…必要はねえ…」

すると瑠奈が目を覚ました。瑠璃は少し笑顔を取り戻したが、すぐに瑠奈の言葉の真意を確かめる

「…どういう事です？」

「簡単…さ。俺…重山…夢村。3人でカタがつくレベルだ、あの機

械兵は」

「…でも今、この新組織にはこの3人しか…」

「…だがな、仲間の兵が沢山居るなら戦況は…変わる」

「…仲間を、犠牲にするつもりですか」

瑠璃の目が険しくなるが、瑠奈は構わず続ける

「無論…殺させはしない。ただ…俺らが抜かれないようにしなきゃな」

「ということは烈火、まさか私たちで切り込み、後ろは任せると？」

「…今に見てる」

「瑠璃様あつ!!」

そこに義兵が慌てて入ってくる。瑠璃は驚いていた

「な、何ですか!？」

「き、機械兵の集団です!! まっすぐこちらに攻めているとの事!」

「…烈火、まさかこれを予知…?」

「さあな…夢村、出るぞ! 瑠璃…お前は悪いが室内待機だ!」

「…は、はい!」

瑠奈がふらつきながら腰元に剣を携え向かった…

「新組織、門前」

「なんとか持ちこたえろ!! 新組織をまもれえっ!!」

「…少し、押されてるか…」

瑠奈達が向かったところには機械兵は既に新組織に到達、義兵と戦闘を繰り広げていた

「烈火にしては随分のんびりな発想ね? これは圧倒的不利にしか見えなだけのだけれど?」

夢村の言う通り、戦線は大分下がり、新組織の門前まで機械兵が押し寄せてきた。重山はどうやらこの戦線には加わってはいないようである

「…重山の奴、どこに行ったんだ…、つと!」

すると瑠奈と夢村の場所にも銃弾が撃ち込まれる。どうやら気付か

れたようだ

「…目、つけられたみたいだけど？」

「任せろ」

すると瑠奈は炎の力を強める。さらに機械兵の注意が瑠奈に寄つてるのが確認できた

「…？」

「夢村、義兵には門前まで戦線を下げて、機械兵の侵攻を許すな、と伝えてくれ」

「？どういう…」

「こうだ！」

すると瑠奈は一気に駆け出し、機械兵の間を抜けていく。機械兵はそれを追っていく

「！？烈火、お前の今の状態じゃ振り切れ…」

「…んなこたあどうでもいい！行くぜえっ！」

すると瑠奈が急に立ち止まり闇の炎に包まれる。すると…

「”酷・浄（こく、じょう）”！！」

瑠奈が機械兵に向かい炎の珠になって突進、すると機械兵はその炎に飲まれ次々消えていった

「…！！」

「夢村あつ！ポケットとしてんじゃねえ！」

「！あ、ああ！」

夢村も爆弾を取りだし機械兵に放つ。機械兵はその爆風で破壊されて行く。そして15分後には完全に機械兵を掃討するのだった…

「…ハアツ…ハアツ…」

瑠奈は疲労が如実に現れるかのように荒い息をしていた。それが心配になり夢村がすぐさま瑠奈の所に駆けてく

「烈火…貴方大丈夫？」

「…心配…ねえよ」

瑠奈は凄い量の汗を流し、剣を杖にすることでやっと立っている状態だった。夢村はそれを見かね、周りにいる兵士に瑠奈の護送を要

請した

「悪い、烈火を瑠璃ちゃんの部屋へ運んで貰えるかしら？」

「は、はあ…ですが、夢村様は？」

「私？私は…すぐ向かうわ。それより、早く烈火を。あれじゃあ休むに休めないだろうし…」

「ゆ、夢村！？おま…」

瑠奈が何かを言おうとしたが、兵に肩を担がれ組織に連れていかれた。それを確認した夢村は…

「…そろそろ出てきなさいよ？」

「…あら、私の存在に気付いてたのかしら？…でしたら、坊やを連れていったのも納得ですわね」

茂みに向かい夢村は話しかけた。するとその茂みから御酒が現れたのだった。御酒は不敵な笑みを浮かべながら銃を構える

「私を撃つ気？どうやら、貴女はずいぶんな自信家のようなね？」

「貴女こそ…、能力者の素質もあまりない出来損ないの癖に、私の前に立ちはだかるつもりですか？いや…実におもしろくないですね？」

御酒と夢村の舌戦が続く。

「私は少し特殊なの。貴女方のように変な力しか使えないタイプには負けませんわよ？」

「…ふふつ、夢の力…侮ると怪我するわよ？」

すると御酒が銃を発砲する。夢村はその銃弾に撃ち抜かれたように見えるが…

「！！？」

「うふふふ…」

夢村の身体がその場から消えていく。だが夢村の声だけは御酒に届いていた

「…小癪な…」

「私の力の一端…見せてあげるわあっ！！」

そして夢村が御酒の目の前に現れ、驚く御酒の顔に手を添え…

「天夢”！！”」

衝撃波を放ち、御酒を吹き飛ばした

「…あら、加減が必要だったかしら？」

「うるせええつ！」

だが御酒も意識はつきりしていたようで、体勢を建て直し夢村めがけてバズー力を放つ。だが…その砲弾は夢村の目の前で止まった。御酒は狼狽してさらに撃つが、全てが夢村の前で止まっていた

「…な、な…」

「馬鹿なのかしら？…こんな遅い砲弾で私を撃ち抜ける筈が無いでしょう？」

夢村はその砲弾に何かの力を加える。すると砲弾は全て夢村の足元に散らばった。夢村は魔女の如き笑顔で御酒に近づく

「私は魔女…貴女なんかに、私は負けないわ？…see you again？」

「！！！」

そして次の瞬間、夢村が衝撃波で当たりを飲み込んだ。…だが御酒を倒すには至らなかったようで、既にその場から逃げた後だった

「あら…最高のおもてなしを受け取らずに消えちゃいましたか…」

まあ構いませんがね？それより…烈火の方を心配しますか…」

夢村はそのまま足を新組織に向けた…

「新組織」

「れ、烈火様！？危険です！！」

「うるせえ！…なんとかなるってんだよ！」

瑠奈は周りの義兵を退け、自力で自分の部屋に向かおうとしていたが、視界が歪み、全身に疲労が襲いかかる今、瑠奈にまともに歩く力すら残されてはいなかった。瑠奈は壁つたいに一步步進む

「…はあ…ぜえ…」

「止まれ、烈火瑠奈」

「…邪魔…だ」

そんな瑠奈の前に重山が立ちふさがった。重山は力を解放し、力ずくでも瑠璃の部屋に連れていくつもりだった

「…おとなしく、光さんの部屋に」

「…あいつに、迷惑を掛けっぱなしじゃあ…嫌なんだな…」

「ふ…姉さんの言う通り、本当にひとの気持ちを读むのが下手なんだな」

そういうと重山は力を消し、瑠奈の肩を担いだ。瑠奈はその行動に呆気にとられていた

「…！？おま…」

「姉さんが光さんの為に尽力していたのなら私も同じことをするまで」

「…変なところで律儀だよなあ…重山の家族は」

瑠奈は苦笑する。よもや重山の妹の指示を聞くことになるとは思っていなかったようだ

「…行くぞ」

「ああ、仕方ねえな…世話焼きが多いもんだぜ、このチームはよ」

「それは貴様とて同じだろう？…烈火」

「ははっ…違いねえわ」

そうして重山に肩を担がれ、瑠奈は瑠璃の部屋へ向かった…

「瑠璃の部屋」

「もう…何でもまた無茶をするんですかっ！？」

「…すまねえって…」

瑠奈が瑠璃の部屋に来た瞬間、瑠璃に凄い剣幕で「そこに座ってください！」と怒鳴られ、現在説教をされていた

「まだ瑠奈さんは戦える状態じゃないんです！それくらい自分で分かってくださいっ！」

「ま、まあ…、光さんも落ち着いて…」

「うるさいよつ、重山っ！」

「うう」

まさかの重山は瑠璃に気圧され、さらに瑠奈に説教を続け、そして説教が終わると…

「…瑠奈さん、とにかく無事で良かったです」

「遅れを取る相手じゃなかったから問題ねえよ」

「そうね…あ、帰還よ、瑠璃ちゃん」

夢村もその場に戻ってきた。夢村はそのまま会話の輪に入ってくる

「瑠璃ちゃん、今回の戦いは結構厳しいかもしれないわよ」

「？それってどういう…」

「簡単よ、敵も能力者。それも…私たちを知る相手みたいね？」

夢村と御酒は面識が無かった為御酒の名前は出てこなかったが、夢村は悟ったようだった

「…そうですか…」

「まあ、相手にとって不足は無いわね。…今の戦力じゃあいずれ押しきられるでしょうけど…」

「とりあえず、今はこの戦力で抑えるしかないだろうな…」

瑠奈はまだ引かない汗を拭いながら、これからの戦いを見据えていた…

14話…再編成、だが…

「新組織、瑠璃の部屋」

「瑠璃様、お食事をお持ちしました」

「ありがとうございます」そちらにおいていただけますか？」

機械兵を退けた後一週間、これといって何もないまま過ぎ、瑠奈の容体も安定してきた。今は瑠奈と瑠璃が共に昼食をとっている

「…瑠奈さん、起きてくださーい」

「…ん…昼…か？」

「んもう…体調は宜しいんですか？」

「まあな…。つか、何で俺は寝かされてんだ？」

「まだ瑠奈さんは無理しちゃ駄目だからです！さあ、ご飯食べましょう？」

「…ふう…」

瑠璃は瑠奈の身を案じ、前線に瑠奈をつくのを禁じたのだ。今防衛線には重山、夢村が出ている

「…なんだかなあ、生きてる心地がしねえ…」

「むう…、でも、まだ瑠奈さんは万全じゃ…」

「…」

根本的に瑠奈の容体の悪化の原因は夢村が生み出した精霊「イフ」が瑠奈に憑依したことで起きていた。だがイフがあまり出てこなくなった所で瑠奈の調子は回復していた

「…まあ、今は休むさ」

「はい…ところで瑠奈さん？」

「ん？なんだ？」

瑠奈は瑠璃に向き直る。瑠璃は目をぱちくりさせながら

「夢村さんから聞いたんですけど…瑠奈さんって、好きな食べ物甘いものなんですか？」

「…なっ!??」

あまりにも唐突だったが、瑠璃は素直に聞いてきたため、瑠奈は額に手をあてながら答える

「…ああ、好きだ」

「特には何が好きなんですか?」

「んぐ…、そ、それって今答えなきゃ駄目か?」

「駄目です。私の疑問ですから」

「お前はいつから急に自己中に…」

「答えてくださいっ」

瑠璃は満面の笑みで瑠奈に詰め寄る。瑠奈は観念し

「…モンブラン…」

「へえ…モンブランですか…」

瑠璃はその情報を聞くと、笑顔で瑠奈に告げる

「じゃあ、今度瑠奈さんが良いことしたらモンブラン、私作ります

っ」

「はあっ!?!? いきなり何を言い出してんだよ」

「作るものは作るんですっ!! 決めましたっ」

そこに、兵が入ってくる

「瑠璃様、瑠奈様。伝令です」

「伝令?…誰からですか?」

「”日光の守護者”からだそうですが…」

「香恋だな。で?」「はい。『事情は聞いたよ』っじゃ、これから

弥枝と聖澤さん達と一緒に新組織向かうからっ」『だそうで…』

「地上では何事も無かったようですねっ」

「だな。…下がっていいぜ」

「…では、失礼します」

近々瑠奈の幼馴染みの日向、泉野が合流することとなった。その事実を聞いた瑠奈は少し考え…

「なあ、瑠璃」

「はい？」

「…もう一回、全員を呼び戻さねえか？」

「え…？なぜですか？」

瑠奈の発言に瑠璃は目を丸くしていた。瑠奈はそれを理解した上で続ける

「地上では何も無かった、だったら問題は地下だけだ。それなら戦力をもう少し集めて一気に問題解決していききたいと思うんだ」

瑠璃はその言葉を聞き、決意の眼差しで答える

「分かりました。戻ってくるように、地下放送を行います」

「？地下放送？」

「まあ、瑠奈さんは少し待っててください。すぐ分かります」

そういい、瑠璃は部屋をあとにする。そしてすぐに、放送が始まった

『聞こえますか、地下の皆さん』

「…」

『機械兵が最近地下の平和を脅かしてる中、皆さんはいかがお過ごしですか？私は今回、ある指令を伝えるためにこの放送を行います。今、私の指示で動いている地下の有志の皆さん、一度その作業をやめ、新組織に戻ってきてください。そして地下の皆さん、これから平和に過ごしてください。共に手を取り、共に生きていきましょう。…また、近々皆さんの元に、私は現れますから』
そうして放送が切れる

「…たく、甘いんだかなんだか…」

「そうかしらね？」

「…こんな代表だから、貴方は仕えているのだろ？烈火」

「…夢村、重山…」

部屋には夢村と重山が戻ってきていた。部屋には笑顔が広がっている
「まあ、楽観的ではあるでしょうね？…あの笑顔は、純粹の塊だもの」

「姉さんがあの人に仕えていた理由、分かってきた気がする。…優しい方だ」

「…へへ、違いねえ。俺らは、そいつのお守りをするのさ。…荷が重いが、いいものだ」

「…ふふっ♪やっぱり敵わないな、瑠璃ちゃんには♪」

そして再び新組織に能力者が集う…。戦いはここから激化して行くのだった…。そしてその夜…

Ⅱ 新組織、道場Ⅱ

『…烈火…瑠奈…。私は…貴方を…殺す…。貴方の力は…あまりにも…脅威…だから…。イフリータ…帰っておいで…？彼に…取り込まれる…前に…』

『ハッ！？』

「はあっ！やあっ！せえやああ！」

瑠奈は道場に足を運び、休んで鈍った感覚を取り戻すべく訓練を行っていた

「…？イフか？」

『…あ、あれ？おかしいな…出てくるつもり無かったのに…』

「寝ぼけたか？」

『ば、バカにするなよっ！？ウチがそんなに出てくるわけ無いじゃん！』

イフは不機嫌そうに瑠奈から視線をそらす

「…どうしたんだよ」

『…え？』

「俺を冷やかす為だけに出てくるほど、お前は安い人間じゃない…それは俺がよく分かってるからよ。なんかあるんだろ？」

『…っ』

イフは見て分かるくらいの汗をかいていた。瑠奈はそれに気付き、イフに声をかけていたのだ

『…呼ばれてる』

「呼ばれてる？」

『うん…』

「誰にだ」

『私、その呼ばれてる場所に行きたい』

「それは、この世界にある場所か？」

『ある』

「そこには、俺も居ないといけないのか？」

『うん、ごめん』

その答えに少し瑠奈は笑い

「ったく、らしくねえぞ、イフ。…だが、悪いが条件がある。戦力は俺一人だ…構わないな？」

『黙って、行くの？』

イフの不安の目線に瑠奈は1つ間を置いて答える。その目には覚悟が映っていた

「多分だが…今回のその場所に行くことは、多分俺にとっても重要な事なんだと思う。だけどそんな俺の身勝手に他のみんなを巻き込みたくない。だから、だな」

『優しいんだね、瑠奈は』

イフが目を伝う涙を拭い、笑顔を見せた。新組織からの援護無しにイフの行きたい場所へ赴く事になった瑠奈。果たしてそこで瑠奈を待ち受けるものとは！？

15話…知られざる真実

Ⅱ第5階層・ミルドクラインⅡ

「っしやあああつ！」

瑠奈はイフを宿し、そのイフが行きたい場所があると言うことで、瑠奈はイフを連れその場所へ向かっていた。だが行く道中で機械兵と遭遇し、戦闘になっていた

『ちよ、そんなに飛ばして平気なの！？』

イフは能力を使うことによって変化する瑠奈の体調を心配していたが、瑠奈は笑ながら

「はっ！残念ながら心配には及ばねえ！今ここでこいつらを潰せば、後で楽になるんだしよおっ！」

そういう瑠奈は炎で機械兵を焼き払っていく。戦況は孤立無援の筈の瑠奈が機械兵の一団を圧倒していた。そして五分もしないうちに機械兵の集団は全滅したのだった

「…ふう」

『もうすぐつくけど…大丈夫？』

イフが心配して俺に聞いてくる。ちなみにイフは精霊なので能力者以外は見えない、よって普通は瑠奈の独り言である

「なんつーか、体調はむしろここら辺に来てからは万全だな。気味悪いくらいだ」

『…やっぱりね…』

イフは瑠奈の返事を聞き嘆息が入る。瑠奈はその理由が分からなかった

「…？」

『…この森の奥に、目的地があるんだ』

「へえ…」

瑠奈とイフの眼前には広大な森が広がっていた。人工太陽の光を覆

い隠すような壮大な森だった

『封印の森…名はありきたりだけど、ここから感じてるんだ』

「感じてる？なんの話だ」

『…目的の、人がいる』

瑠奈はその言葉に耳を疑った。眼前に広がるのは本当にただの森、人が住んでいるとは到底思えなかった

「…人だあ？そんなまさか…こんな場所に物好きな」

『し、信じてくれないの？まあ…居るのは精霊の長だからね…』

「…何？」

また耳を疑った。イフ達のような能力を宿した精霊が存在するとイフは言うのだからだ。瑠奈は疑問が山積みになったが、吹っ切れたように

「…仕方ねえ、乗り掛かった船だ。行くしかねえか？」

そういい、森に向かって歩を進めていった…

〓新組織〓

「…瑠奈さんが、居ない？」

そのころ、新組織では瑠奈が消えたことで大騒ぎになっていた

「は、はい！いろんな箇所の部屋を見てきましたが、どこにも…」

「瑠奈さんは、荷物は大体持つていつてますか？」

「は？…ああ、実は烈火様の部屋にいつも使う刀はあった、と…」

「刀を置いていった…？」

「その様子だと、どうやら機械兵絡みではないらしいな、光」

「重山…」

その場に重山が現れる。重山もその騒ぎを聞き、新組織周辺を操作していた。だが成果が上がらずとりあえず帰還したのだった。重山は剣幕で瑠奈を罵倒する

「あの熱血男が…面倒事をよく呼ぶ…」

「ち、ちよつと重山…」

「同感だよ、あいつは基本面倒だし！」

「…烈火だから、仕方ない」

そこに、地上から合流した日向と泉野が入ってきた。二人は瑠璃に会釈をした後すぐに重山に向き

「だけど、それだから一緒に居て楽しいんだよ！」

「…貴女に、瑠奈を否定なんてさせない」

「…っ」

重山に対しきつく当たる。日向と泉野は元々瑠奈と地上で知り合いだった為、瑠奈の事をよく知っていた

「瑠璃ちゃん。この人は飛鳥の妹？」

「は、はい。重山雫…飛鳥の妹ですね」

「…」

「飛鳥と容姿だけじゃなく、性格も似てるね？」

「…姉さんを侮辱する気か？」

「いやいや、別に馬鹿にしてる訳じゃないさ、ただ、ビックリするくらい似てるなあと…」

「”剛打”！！」

すると急に重山は日向に向かい正拳を放つ。日向はなんとか反応し槍で攻撃を防ぐが重山の力が強く、日向は壁に叩きつけられる

「つてて…何すんだよっ！！」

「すまん、つい手が出してしまった、許せ」

日向が怒る中重山は涼しい顔をしている。どうやら重山は悪意があった訳ではないようだ。それを汲み取った瑠璃は日向をなだめる

「まあまあ日向さん、あれが雫の触れ合い方なんですよ」

「！？」

「えー、こんな強烈なコミュニケーション取られ続けたら…命がやばいって！」

だがここで重山は目を見開いていた。瑠璃はすぐ気付き、重山に話しかける

「どうしたの、雫？」

「ひ、光様…。私を…名で…」

「あ、それか…。うん、貴女のお姉さんも名前…飛鳥って呼んでたから、貴女も同じように扱うべきかなって…」

「…」

「だって、飛鳥も雫も…大事な仲間だから」

爽やかな笑顔を瑠璃は重山に振り撒く。その表情に重山は少し困惑していたが、すぐに瑠璃に向き直り、笑顔を返した

「…ええ、分かりました。では、私の事は雫で…」

「はい、これからもよろしくです、雫」

「…あー、瑠璃ちゃん？」

日向が少し気まずそうに話しかけてくる。瑠璃は慌てて日向に向き直る

「あ、そうですね、呼んだ訳ですよ」

「それは分かってるよ。機械兵でしょ？」

「…え？」

そこで泉野がしばらく振りに口を開く

「…地上にも、少数ですが、現れたんです」

「…!!」

「…数が少なかったんで、私たちだけでカタが付きましたが…。いたい、あれは何なんですか？」

「…まだ私たちも分かってないの。とりあえず今分かってる情報はここ新組織、いや…烈火瑠奈を狙っている、という事かな…」

「瑠奈を!？」

日向は驚いていたが、この反応は無理もなかった。あくまで瑠璃の推論ではあったが、今まで瑠奈自身を狙っていたのは闇本と紅だけだったからだ。瑠璃は続ける

「あくまで推論ではありますが…新組織を狙うにしては建物への直接攻撃が無いと言うこと、瑠奈さんが出陣すると瑠奈さんに攻撃が集中していること、そして瑠奈さんが今精霊を宿していると言うこと…以上を踏まえれば説明がつくんです」

「…道理は通ってる」

「でもその割に今、瑠奈の姿が見えないんだけど…」

「その瑠奈さんの行方を今探してるんですが…日向さん達もご存じないみたいですね？」

瑠璃の問いに日向は嘆息し

「そりゃあね…あの一件から瑠奈は地上には一回も姿を現していない…地下にいるんじゃないの？」

「つい先日から行方が分からないんです。新組織にいるみなさんは心当たりがないようですし、零さんたちは伝令精霊を出しましたがまだ帰還できないでしょうから…」

「…あくまで仮説ですが、いい？」

泉野が何かに気付いたようで、日向と瑠璃に話し始める

「…光さんは、以前瑠奈さんに精霊が宿った、と言っていましたよね？」

「はい、夢村さんが召喚したんですが…」

「…着眼点はそこです。なぜ夢村さんが召喚したにも関わらず、その精霊が瑠奈を選んだのか…それを考えましたか？」

「それは…その精霊が瑠奈さんと同じ”炎”の守護者だったからじゃない？」

「…でも以前の瑠奈さんはそのような状態に陥ることなく能力を開放しています。勿論私たちも例外じゃありません。私たちにそのような精霊が宿っているというのも古文書には記載されていません」

「弥枝、そんな文書どこで読んでるのさ!？」

日向があわてて突っ込むが、泉野は表情を変えず続ける

「…私はあなたのように常に動き回ってるわけではありません。空き時間には読書をしているのです。…脱線しました。…その精霊は何らかの目的で瑠奈に憑き、瑠奈にその目的を達成させるため、姿を眩ました…それが妥当でしょう」

泉野は、イフは自分に課された目的を達成するため同型の能力を持つ瑠奈に憑依し、目的を遂行しようとしていると考えたらしい。だ

がイフの人物像を知っている瑠璃は、泉野に反論する

「で、でもイフさんはそんな私利私欲のために瑠奈さんに憑いているとは到底思えないんですよ。私が見たイフさんは、好奇心、いや…むしろ好意を瑠奈さんに持っていると思うんです」

泉野は瑠璃が反論してくるとは思ってはおらず、多少狼狽しているが、それを払うかのようにメガネを外し答える

「…信じるのは大いに結構です、それが光さんのいいところですから。…ですが現実、裏切りなどは身近に潜んでいるものです。私たちは、いい例を見ているでしょう？」

「…イツキ先生のこと？」

日向が確認をしていたが、新組織のメンバーはその人物につらい目に遭わされていた。宝冥寺逸姫、瑠奈の高校時代の担任である。その担任教師が龍を開放しているのだ

「…それは…」

瑠璃は表情を曇らせる。実体験である以上、正論を言っているのは泉野だった

「…とりあえず、他のメンバーの帰還を待ちましょう。それからでも遅くはないでしょう」

「ミルドクライン、封印の森」

「…なあ、この森、一本道じゃねえか」

『…おつかしいなあ…、昔はもつと森っぽかったのに…』

瑠奈はミルドクラインの封印の森に足を運んでいた。イフは以前にもここに来ていたらしいのだが、以前と構造が違うということで困惑していた。瑠奈はその状況に呆れていた

「おいおい…これじゃあ森でもなんでも無いだろ。ただの抜け道だ。とてもじゃないが人が住んでいるなんて…」

『で、でも確かに場所はここなの！私、前にも来てるし！』

「…疑問なんだが、精神体であるお前がどうやってここにくるんだ

？」

『一応私たちは精神体ではあるけど、肉体を借りることで一時的にはあるけど現実世界に出られる、それは瑠奈もわかっていてるでしょう？』

「ああ、だったら以前も人の体を借りていた時期があるんだな？」

『そりゃあね！能力者であれば誰でも憑依可能さ！…あの時も確かに炎使いだったかな？』

「その時は何を話したんだよ？その長とやらとよ？」

瑠奈にとっては当然の疑問だった。瑠奈はその精霊の長の正体を知らなければ、能力を宿す精霊がいるのもイフが現れて初めて気づいたのだ

『大体話す内容は一つ、能力者の状況なんだ。能力者の数は天然に生まれたものは数が決まっているから、一つの能力者は今定員道理いるかの確認だよ。』

「…天然？どういうことだ。現在の地下には溢れかえるばかりの能力者がいるぞ？」

瑠奈はイフの今の発言に反応した。能力者の人数は精霊により調節されていた…？

『そうだね。今、地下には沢山の能力者がいるよ。…だけど、それが人口のものであれば私たちに入っていく余地はないんだ』

「人口だと？能力者を人工的に生み出すことも可能なのか？」

瑠奈は驚きのあまり声が大きくなる。イフは構わず続ける

『方法はわからない。正直人間のやることに興味はないよ。だけど遺伝子进行操作したりしたらたまたまできちゃったんじゃない？』

「んな簡単に出来るわけないだろ？だっておかしいじゃねえか、手から火を出したり、水を発生させたり…」

『そんな疑問、もつと前に持つものじゃない？…瑠奈、貴方の能力は紛れもなく天然、それはウチが保証する』

「…何が言いたい」

『夢村：だったっけ？あの人の能力こそ、人口の力なんだよ』

「…は？」

瑠奈は呆氣にとられていた。そんな話は聞いたこともなければ、実際に手の甲にも文字が…

「！」

『気付いたね。そう。本来能力には世界に存在しない元素は出ない。夢なんてまさにそう。…あの人は…』

『紛い物だ』

16話…知られざる真実？

Ⅱミルドクライン・封印の森Ⅱ

『紛い物だ』

「…！！」

『…この声…』

瑠奈はイフが目的地と定めていた封印の森へ足を踏み入れていた。ある程度進んだ場所で瑠奈とイフが話をしていると不意に声が聞こえていた。だが周りは見渡す限り森で人の気配はしなかった。瑠奈は刀を持ってきてないことを悔やみながらも、能力を解放する。それをイフが気付き驚く

『っ！？な、何をするつもりだよっ！？』

「…警戒するに越したことは無いだろ。…どうやら、あまり歓迎されてないようだしな」

瑠奈は先程から森がざわついていたことに気付いていたらしい。声の主はまた瑠奈とイフに語りかける

『…イフリータ、今回は随分と生氣に満ちた人間を連れてきたか』
『やつぱり…、うん！今回は自信があるよ！』

イフはその声の主と、まるで知人の様な会話をしていた。瑠奈は疑問に思い、イフに訪ねる

「イフ、どういう事だ？この声の主はお前と知り合いか？」

イフはその言葉に呆れ、答える

『…さっきまでの私の話、聞いてなかったの？この声の主は精霊の長だよ』

「へえ…長、ね…」

この声の主はどうやら精霊の長らしい。その長は状況を理解した瑠奈に語りかける

『イフリータから説明をされているようだな。我が精霊の長だ』

「…そうかい」

瑠奈は警戒を解かなかった。声しか聞こえないためどこから仕掛けられるか分からず、敵意も図りかねていたからだ

『瑠奈！？なんでそんな喧嘩腰…』

イフの心配をよそに、瑠奈は自嘲気味に笑いながら声の主に語りかけた

「おい、その精霊の長とやら！俺は貴様がどんだけ偉いか知らないが、声だけで俺を出迎えるとは、客人に対して失礼じゃねえのか？せめて貴様の方から名を名乗ったりはしないのか？」

その言葉は確実に精霊の長に喧嘩を売っていた。その言葉を放った事でイフはさらに慌てる

『んなっ…馬鹿瑠奈っ！！なんで長に喧嘩売ってんだようっ！！』

「いや、これが筋だろうと思ってるな。…実際、全く来る内容を教えず俺をここに連れてきたお前も十分失礼なんだがな、イフ」

『んぐ…』

だがイフの心配は無駄だったかのようになにその声の主は笑い飛ばした
『はっはっはっ！おもしろい人間よ…、大概の人間なら我に恐れをなすんだが、お主は違うようだ！その落ち着きを見るに、随分な苦難を越えてきたと見えるな』

「まあな。まあ、その苦難も今となっては退屈しなくてすんだ1つの出来事に過ぎないんだがな。…で、礼儀は通すのか？」

『ふん、堅い奴よ…我の名は覇天^{はてん}皇^{すめら}、イフリータの情報通り、精霊を束ねる長だ』

だがここで瑠奈は疑問を抱いた。イフは横文字の名前なのに、皇はどうやら横文字では無いようだった

「…？」

『疑問に思っのも無理は無いだろう。我も基本的には地下世界にいるのだ』

「…地下に？」

『常に精神体で世界の監視はキツくてな、時には生身の身体で徘徊

した方が楽なのだ』

「そんな理由でお前の様な得体の知れない奴にウロウロされても困るんだが…」

『はっはっ！確かにな！…さて、先程の話の続きをするか』

「待ちやがれ。生身の身体があるならその姿で出てきて話をしろ。」

…森と話すほど病んでねえからな」

瑠奈は霸天に姿を現すように要求した。イフはその時『精神体のウチと話してたら周りからは病んで空気と会話をしてるようにしか…』と言っていたが瑠奈は無視をした。その要求に霸天は

『いいだろう』

『ち、ちよつとまつ…！？』

とだけいうと、森がざわつき、止んだ。先程の様なざわめきは全く起きなくなった。ただ、イフが何か叫んだ気がした

「…？イフ？」

「待たせたな、”炎”の守護者」

「…！！？」

瑠奈は姿を見て驚いた。なんと霸天は女性だったのだ。髪は真っ白で襟足は腰当たりまで伸び、顔は凄く美人でスタイルも良かった。

…服装は何故か巫女服だったが、瑠奈は気にしないことにした

「女…か」

「そんなに我が女だった事が驚きか？イフリータも女だったし、そんなに驚くことでもないだろう」

「た、確かにそうだが…。ところで、お前イフに何かしたのか？」

「ああ、何かしたわけでは無いが我が実体化したときは各精霊はこの世界には出てこれなくなる。まあ、我がまた精神体になれば戻ってくるから安心せい。ほら、イフリータがお主に渡した石、輝いておろう？」

霸天に言われたように瑠奈は左腕につけていたブレスレットの石を見ると、いつもよりも輝いていた

「つまり、今はこの石の中で一休み、か」

「簡単にいうとそうだな。…では、先程の話をしようではないか」

「…夢村の力は紛い物、って話だな」

瑠奈と霸天は先程話していた話をし始める

「世界には能力は基本元素が絡む物しか能力にはなり得ない。…夢は人間の幻覚だ。本来それを操ることは能力では不可能なのだ」

「それは理解出来るが…だったら何故夢村の手の甲に夢の文字が浮かぶ？」

「最低でも我はあの様な力を地下にもたらした記憶は無い。我は神とは違うが、能力の創成は行っているからな、それくらいは分かる」
「…ちよつと待てよ、お前ら精霊はこの世界が生まれてからずっと存在しているのか？」

瑠奈はその疑問にぶち当たった。そうでないと能力の存在の起源が分からなくなってしまうからだ

「まあ、我は最近生まれた存在だが、世界が生まれたところから精霊は、そして能力は存在していた」

「…まじかよ」

「我は歴史には興味は無いから今一歴史は分らんが、今度人間界の資料で調べてみるがいい。…そして、そのような異端の力は何故生まれているかも分かるう」

「…？」

霸天は言葉を濁した。瑠奈には今一意味は図りかねていたが、今聞きたいことはその話では無かったため追求はしなかった

「では何故、我はその単語に反応してお主に語りかけていると思う？」

「…さてな」

「そのような異端能力が我らの存在を消滅に追い込むのだ」

「！？」

瑠奈は耳を疑った。どうやら夢村等の存在が精霊を消してしまうらしいが、全然理屈が分からなかった。霸天は顔に悲壮感を漂わせていた

「初めの内は歓迎した。我が産み出していない力が生まれるのは我にとつては未知なる発見だったからな。だが…そのような力が現れはじめてから、我らの力が消え始めた」

「…意味がわからねえよ。何故そうなる」

「世界には能力を使うのに必要なエナジーがある。そのエナジーは我らの存在を維持するのにもとても重要なのだ」

「…そういう事か」

つまり紛い物と吐き捨てる意味は霸天達精霊に取ってマイナスの存在だったからだ

「…お前は…もしや…」

瑠奈の額に汗が伝う

「君は察しいいいな…。そうさ、我は我らの仲間を守るためにその異端能力者を排除する」

「…！！」

瑠奈はさらに汗が額を伝う。霸天が言う意味は夢村達を攻撃すると言うことだった。そして霸天はさらに脅す一言を放つ

「それは君も例外ではない。…”闇”と”炎”の二重能力者…、^{ダブルマスター}烈火瑠奈」

「…！！？」

そして霸天は一瞬の内に烈火の懷に飛び込み、胸に手を据える。そして…

「オヤスミ…」

「！はやいつ…！！？」

次の瞬間、瑠奈の身体は宙を舞った。衝撃波を放たれ、打ち上げられたのだ。そこにまた一瞬の内に霸天が回り込み…

「”ファーストコンタクト”」

「…っ！！」

空中に舞った瑠奈に光の剣を突き刺した。瑠奈は少し体勢を変え、なんとか肩を刺される形で済んだが、そのまま地面に叩きつけられ、地面と共に肩を突き刺され、その場を動けなくなった

「うあつー!!」

「ふふ…君は簡単には殺さない。君に今覚醒されては困るからね」
「…どういうっ…!?!」

瑠奈は肩の剣を引き抜こうとするが、ただ肩口から出血が増すばかりだった。それを見ながら覇天はいたずらな笑みを浮かべながら答える

「殺すって事はつらいこと…だから。大丈夫、別に能力が使えないようにするだけだから」

「…能力者にとってはそれは死だ。お前にも分かっているだろ!!」

「…ふう、もうこれ以上は話す必要は無いでしょう。…黙りなさい」
そして瑠奈の頬にキスをする。すると瑠奈の全身が麻痺してしまい、瑠奈は動けなくなってしまった

「…があっ…!お前…この…!!」

「大丈夫、きつと君も解放してあげる。…それまで眠っていてね」
「…!?!」

そして瑠奈は意識を失ってしまった。覇天はその場で寂しげな笑みを浮かべ、歩き出す

「…眩しい男だね…烈火瑠奈。だけど、私ももう退けない…引き金は引かれたの。生きるか、死ぬか…。私を止めたければ、覚醒することね」

そしてその場を立ち去る覇天。だがその後…意識の無い瑠奈の横の空間に光の穴が生まれ、そこから少女が地面に叩きつけられるように出てきた。…イフリータだった

「イタタタ…。あ、あれ!?私…肉体がある!?それに…瑠奈!?!…とりあえず、まずは剣を…」

瑠奈の闘いの時代はまた、動き出したのだった…

17話…謁見

「新組織」

「…駄目だあ…見つからないよう」

「…すいません、発見出来ませんでした」

「ワリイな…見つからなかったわ」

「…ふむう…」

日向、泉野、風野が瑠奈搜索に向かったがごとく外れ、瑠璃は悩んでいた。瑠奈は地下に襲撃する謎の機械兵に対抗するために無くてはならない戦力であり、また瑠璃に取って大事な人間であるからだ

「…何で姿を消したんでしょう、刀を持ってないって言うのも理解できないですし…」

今この場には瑠璃の他に常に付き添っていた今では軍師的立ち位置の夢村、瑠奈を搜索していた日向、泉野、風野が居た。他のメンバーにも瑠奈の搜索および周辺の警護を頼んでいるので今この場には居ないが十分な戦力が揃っていた

「瑠璃ちゃん、もう諦めたら？あいつの事だから死んでるって事は無いと思うわよ？」

夢村は少し疲れた顔で瑠璃に提案する。だが瑠璃は難しい表情のままその意見を却下する

「確かにそれでも問題はありますが…やっぱり戦力は多い方が良いです。それに…」

「貴女にとっての心の支えでもあるしね？」

夢村がからかうように言うのと瑠璃は顔を赤くしてうつむいてしまう。日向はその場を見かねたか1つ咳払いをする

「とにかくにも、これだけ探しても見つからない、手がかりも全く無いとなると正直らちがあかないよ。私たちは能力者だけど私や

弥枝は地下の皆と違って探知能力は皆無だし、風野の兄ちゃんの能力にも引つ掛からない。そして他のメンバーからの連絡もない…。だったらやっぱり、瑠奈自身が帰ってくるのを待つだけなんじゃ…」

「失礼」

日向が話している最中、不意にドアが空くとそこには天導が居た。

天導は瑠璃に

「瑠璃、客人が来てる。お前に面会したいそうだが？」

天導はどうやら瑠璃に会いたい人間を連れてきたらしい。瑠璃はその人物に心当たりは無かったが、天導の表情を見たところどうやら天導も知らない人間らしかった。瑠璃はその場から立ち上がり「分かりました、向かいます。…どこに行ったらいいんです？」

「行くんだな？だったら案内するよ。…こつちだ」

そついい天導が部屋を後にすると同時に、瑠璃も部屋から天導を追うように出ていった…

「新組織、謁見の間」

「…」

とある女が、愛の巫女の登場を心待ちにしていた。…その女は、正直悩んでいた。先程、烈火瑠奈という男を退けた。だが自分の、仲間の存亡を救う目的のためにはいえ、あの男の目が焼き付いていた。…「止める」という、女と同じ仲間を想う、目のせいで

「…我は悩む必要など無い。我は…正しいのだ…」

「お待たせしました」

そこに瑠璃が現れる。…あの男が護るにしては、あまりにも不釣り合いな女性のように霸天には見えた。瑠璃は笑顔で霸天と顔を合わせる

「私の名前は光瑠璃、地下の統治者…と言うんでしょうかね？…貴女の名前は？」

瑠璃は少し柔らかい雰囲気で話しかける。霸天はその雰囲気にたじ

るきながらも言葉を返す

「霸天 皇…」

「霸天さん…ですか、良い名前ですね？」

「…そうなのか？」

「はい、多分…」

「…」

霸天にとっては瑠璃は眩しすぎた。森の中で淡々と生活していたせいもあるのか、瑠璃が生き生きしているように見えたのだ。…だが、霸天の心は揺らがない。何故なら仲間、そして自分の命がかかっているのだから

「…我…、あ、私は…瑠璃さんをお願いがあつてきました」

「お願い…ですか？」

「はい…あの…」

そして霸天は、これから発生する闘いフラグをここで発生させる…

「貴女のような二重能力者…、さらに異端能力者の身柄を差し出しなさい。私の手で貴女達を葬ってあげる」

「…!？」

瑠璃と天導にめがけ霸天は衝撃波を飛ばした…

「封印の森」

「…っっ…」

「あ、目覚めた？」

その頃瑠奈はやっと意識を取り戻していた。瑠奈はイフが実体化していることに驚きはしたが、すぐに冷静になり、イフに現状を聞いた

「…だとすると、既に霸天は…」

「うん…。何故か私、今実体化出来ちゃってるって言う理由もそれで辻褄が合うんだ」

「封印の森を抜けたら新組織に行くには苦勞はしないだろうから…だが、これはまずい…！」

瑠奈は直ぐに動こうと身体を起こす。そして直ぐに抜けようと歩を進めようとした瞬間、瑠奈の頬を矢がかすめて行った

「…！！」

「…いつのまに囲まれて…！？」

周りには武器を構えた人間が瑠奈とイフを包囲していた

「…まったく、意地でも出さないってか？覇天も俺を止める自信が無いと見えるな」

「んな悠長な事を…！」

そこにさらに矢が放たれる。だが瑠奈はそれを顔に刺さる前に掴んだ。それを見た兵は狼狽していた

「な、何だよ、瑠奈…そんな簡単に…」

イフが恐怖する中、瑠奈は冷たい笑みを浮かべ、矢を捨てる

「ふう…出来れば無闇に戦闘はしたくなかったが…こうなったなら仕方ねえな。悪いが今の俺は急いでんだ、通らせてもらっぜ…機械兵…！」

瑠奈は周りを囲んでるのは機械兵だと言うことに気付いていた。それを悟られた兵はさらに狼狽し、一体が瑠奈に斬りかかる。だが…

「瑠奈っ！」

「ぬるい、こんなん俺を捉えられてたまるかよ」

瑠奈はその剣をかわし、顔面に拳を叩き込む。瑠奈は同時に能力を解放したため兵の顔が吹き飛び、身体はその場に倒れた

「…！！」

イフはその姿を見て驚きを隠せない。自分が力を貸さずとも瑠奈は炎を100%…それ以上うまく扱っているからだ

「へっ…、俺自身でも驚きだ。この力…まるで自分自身じゃねえみたいだな。このまま突破する！イフ、ついてこい！」

「あ、ああ…うん！」

そうして瑠奈とイフは包囲を打開にかかるといった…

18話…劣勢

「封印の森、中心部」

「”暗黒拳”！！」

「ちえいあっ！！」

イフと瑠奈は新組織に向かった覇天を止める為に機械兵によって作り出された包囲網の突破を試みていた。だが機械兵は無尽蔵に現れ、次第に包囲網が狭まっているのが感じられた

「…ちいつ、こいつら、次から次へと…！！」

「瑠奈！これ以上戦うのはただの能力の浪費だよ！何か他に策を考えなくちゃ…！」

イフが言いたいことは瑠奈にも分かっていた。どのみち遅かれ早かれ覇天とは戦わなきゃならない、相容れない存在であり、今ここで力を使いすぎれば不利になる一方だと言うことは。だが包囲網に未だに亀裂が入らない今、瑠奈にとっては焦りが先行し余裕が無かった為こうするしかなかったのだ。无尽蔵に現れる機械兵、これを出るだけ楽な形で抜ける方法は…

「…空か…！」

「！？空？」

瑠奈は唐突にその言葉を口にする。イフはいまいち言葉の意味を分かてないのが瑠奈に伝わった為、すぐ瑠奈は説明を入れる

「さすがの機械兵も見た限り陸戦型だ。空を飛ぶ仕様にはなっていない。だったら俺らが空を飛べばこの包囲網を抜けられる筈だ」

「で、でも空を飛ぶ手段はどうするのさ！？」

「…そこが、な」

「手段無いの！？じゃあなんで言ったのさ！」

「…何か策を見つけないきゃ、俺ら、最低でも俺は間違ひなく死ぬ。だったら1%でも確率があることを考えるさ。例えば…空から救援が来るとか、な」

「そんな事はまず無いよ！だって…」

「だって…なんだ？」

瑠奈はその言葉を言うのと口元を吊り上げる。イフが困惑し、瑠奈が見ていた方向に視線を向けると…

「ガルルウオオッ！！」

「…！！？！」

空から…翼が生えた女性が降ってきて、機械兵の一角に突っ込んだ。一部が一撃で壊され、機械兵の攻勢が止むとその女がこちらに歩いてきた

「…烈火、見つけた」

「ああ、ナイスタイミングだぜ…天鳳院！」

瑠奈はその女性を知っていた。地下闘技大会で同じチームにいた、天鳳院琉季だった

「…状況は？」

「思ったより敵の数が多い。そして今事は一刻を争う…出来ればここはこれ以上の戦闘は避けたい。だから…」

「空から突破…する？」

天鳳院は瑠奈が最後まで言わずとも言いたいことが分かるようだった。イフはその様子を見ていたが

「でも二人をいっぺんに運ぶのは無理なんじゃない？背中に乗るわけにも行かないんだし…」

「…うん。そう。だから、泉野って人からこれ、預かった。烈火、これに乗る」

天鳳院が淡々と話し、ポケットから何か板上の物を取り出した。そしてそれについてるボタンを押すと一瞬の内にスノーボードのような板に変わった

「…あいつ、知らぬ間に発明家になったのか？まあいい…とにかくこれに乗るのはいいが、使い方は…」

「…自分の力を推進力に、それだけらしい」

「…は？」

天鳳院は事も無げな発言をするが、あまりにも意味が分からず、首を捻った

「…じゃあ、私はこの娘と行くから」

「あ、ちよっ…まだ心の準備があああっ！？」

そして天鳳院はイフを抱き抱え飛び立った。そしてこの場は琉など機械兵のみとなった

「…一か、八か…。おもしれえ！行くぜ…！！」

そしてその板に乗る。すると急にホバリングが始まり、いつでもスタート出来るよう準備が整う

「バーニングイグル”豪炎鷹”！！飛べえええっ！！」

そして瑠奈の掛け声に呼応するようにその板は瑠奈の制御の元、新組織へ向けかつとんで行った…

〓新組織、謁見の間〓

「私たちの生き残りの為、貴女を含む異端能力者の引き渡しを要求します」

「…！」

「へえ…そうくるかい、困ったねえ…どうも」

瑠璃と天導を前に、霸天が高らかに宣言した”異端能力者狩り”は、瑠璃に動揺を与えるには十分過ぎた

「勿論冗談のつもりは一切無い。我には我の存在、我の仲間が存在が懸かっているのだ」

「だからと言って、私たちに身柄拘束の話を持ちかけられても…何が何だか…」

「貴女達が居ると、私たちはこの世から消える存在。私たちが存在し続けるには貴女達を消すしかない」

「消す、と言うことは僕らを殺す、と言う捉え方で間違いないかな？」

瑠璃に代わり、今度は天導が霸天に問いかける。霸天はその問いを鼻で笑う

「無論、血を流さずに出来るなら、お前達的能力を抹消させる事も可能だ」

「…それを、私たちが許すとても？」

瑠璃が一気に敵意を向ける。霸天はその様子に笑顔で返す

「勿論、ありえないでしょう。だから、実力で消すだけ。…」インパクトハリケーン」

「…!!」

霸天が急に瑠璃と天導に向けて掌をかざし、そこから竜巻が発生し瑠璃と天導を飲み込み、建物を破壊した。霸天は悲しみがこもった瞳で決意をする

「…全てを壊してでも、皆を守る…我は…守る！」

「封印の森上空」

「…!!」

「どうしたんです？天鳳院さん…!？」

イフは天鳳院に抱えられながら封印の森を通過した直後、上から爆発音が聞こえてきた

「…聞こえたみたいだね。新組織、襲撃を受けてる。…急がなきゃ」

「…うん！…あれ？」

「…どうした、イフリータ？」

「…いや、何でもありません」

イフは身体に異変を感じながらも、天鳳院には黙り先に向かった…

「封印の森出口」

「のわあああつ!?!」

瑠奈は天鳳院に貰った板で封印の森を脱したが、そのままコントロールを失い昇降エレベーター前で不時着した。そのまま板は壊れたが、瑠奈は奇跡的に無傷だった。瑠奈はすぐに身体のほこりを落とす

「…とにかく急ぐか…嫌な予感がする…」

そして瑠奈は昇降エレベーターで新組織がある第4階層へ向かう…

「第4階層、クラシックフィールド、昇降エレベーター前」

「…!!?!?!?…燃え…!?!」

第4階層に着いた瑠奈が見た新組織は既に変わり始めていた。建物の上半分が吹き飛び、燃え上がっていたのだ。そして眼前には機械兵が包囲していた。だが今の瑠奈にそれは見えていない

「…貴様等…殺される覚悟…出来てるなああああつ!?!?!」

瑠奈が叫び、闇の力が解放される。そして闇の波動を生み出し機械兵を一蹴する

「…霸天…貴様あ…!?!」

一瞬で包囲を崩した瑠奈は勢いをそのままに新組織へ急行するのだ
つた…

19話…恨みの連鎖

「新組織、崩壊した謁見の間」

「…まだ生きているか」

「…う…」

霸天が放った一撃は瑠璃や天導を殺すには至らなかった。霸天の前には頭から血を流す瑠璃が倒れているだけで、天導は見当たらない。霸天は少し疑問を抱えつつも、第2波を打つ構えを取る

「…何故力を使わない、愛の巫女」

「…」

「使わねば、死ぬぞ？」

「…嫌」

「何？」

「嫌、また…私の力で人が傷つくのが…」

瑠璃が血が滴る額に手を当てながらなんとか立ち上がる。どうやら傷口は深いようで額からは血が止まらなかった

「私は私なりのやり方で平和を掴んだ…だったらそれを継続させるのも、私なりのやり方で続けさせる、それだけ…」

「そうか、だったらその戯言も打ち砕く。巫女本体には恨みは無いが、これも我らの存在を残すためだ」

霸天は二度目の衝撃波を放つ構えを取る。瑠璃は途絶え途絶えの意識の中、能力の解放を行おうとするが…

「…困ったね、どうも。それを許すわけにはいかないんだ」

天導が瓦礫から出てきたのだ。天導も頭から血を流してるようだが、瑠璃よりは傷は浅いようだ。天導は空間から槍を生み出す

「君の相手は私だ…霸天君」

「私の相手をするか…気に入ったぞ。汝、名は？」

「天導誘貴。旧地下組織の本来の代表、ってとこかな。…悪いが私

は君が嫌いだ、霸天皇」

「ふふ…我も汝が嫌いだ、天導。今ここで…消してくれる」

すると霸天は瑠璃へ向けていた手を天導に向け、衝撃波を放つ。ただ天導はその衝撃波に槍を突きつけることにより衝撃波を引き裂いた

「ふむ…正面からではダメージは与えられぬか？」

「困ったね、どうも…。私にこの程度で何とかしようと思うのが間違いだ」

「では、これではどうか？」

続けざまに霸天は地中から石の剣を生み出し、それを天導目掛けて飛ばす。その攻撃も天導は槍を前方で回転させることで防いだ。天導は不適な笑みを浮かべ、槍の先を霸天に向ける

「まさかこの程度で終わるって事は無いよね、霸天君？」

その笑みに霸天も笑顔で答える

「勿論だ。今のは小手調べ…この程度で果てる者に用は無い。…次は汝の番だ、天導誘貴」

そつうい霸天は二三歩下がり距離を取る。天導はそれを見るや、すぐに距離を詰め槍の一閃を放つ

「はあっ！」

「ふむ…悪くない」

だがその槍を霸天はいなし、天導に短刀で切りつける。天導はその動きを見切っていたようでその攻撃をかわした。瑠璃はこの動きを見ながら、なんとか部屋の外への脱出を図り始める

「…誘貴！」

「分かっているって…この場を引き受ければ良いんだろう？」

天導は霸天の攻撃を防ぎながら瑠璃の言葉に答える。瑠璃はその返答を確認したのち、部屋のドアに手をかける。幸いドアは壊れていなかったようでドアは開いた。その姿を霸天は見ていたが、あえて追わなかった

「…逃げるか、愛の巫女。だが我は逃がさない…貴女を倒さなきゃ、我らの存在が無くなる…」

「…さつきから…同じことを…！」

瑠璃は部屋を出る間際、霸天に対し叫んだ

「私はっ…、死なない！…いや、死ねないの！地下の、地上の…皆と掴んだ平和の中で、生きていくんだ！そのなかに…貴女が入っていない訳じゃない！絶対に…共存の道も見つけてあげる！」

「…何を戯言を。速く消えろ。残りの余生、楽しみたまえ」

霸天は天導と競り合いながら、瑠璃を追い出すように吐き捨てた。そして瑠璃は額に流れる血をぬぐいながら外に飛び出すのだが…

「新組織、門前」

「…！！」

瑠璃はふらつきながら新組織の正門まで来たのだが、正門には機械兵が新組織の兵と戦闘を繰り広げていた

「…何故、ここに機械兵が…」

「光か！？何故ここに？」

「瑠璃ちゃん！頭から血が…」

その中には風野と日向が奮戦していた。二人は瑠璃に気付く近くで守りを固めながら現状の確認を進めた

「瑠璃ちゃん、その傷…」

「私は大丈夫。でも誘貴が…」

「んな人の事気にしてる場合…っても、お前の様な頑固者には何いってもだめか。…にしても、都合が良いように出てきたな、機械兵」

「…ただ、霸天…先ほど来た来客が私を襲ったんですが、その人は私を追わなかった…もしかしてこの伏線が？」

「分からない…でも、今この状況はまずいよ！他の皆がどうなってるのかも分からないし…」

「…逃げるに、逃げられない…私は…ここで…」

「何をいつてんだ、光。俺らが居る限り誰も死なせねえよ！」

風野が竜巻を生み出し、機械兵を吹き飛ばす。日向も槍を構え、機械兵に突進していく。瑠璃はその場で佇むしかなかった

「私は…私の…存在は…」

すると瑠璃の脳裏に瑠奈や民にした事が蘇り、瑠璃を苦しめ出した

「嫌…嫌…！！私…私はっ…」

そして瑠璃がその場にうずくまった時だった。

「どきやがれええっ！！俺は…貴様等に用はねええっ！！！」

機械兵が奥から急に吹き飛んでいく。瑠璃は頭を押さえながら視線を向けると…

「”闇飲波”！！」

瑠奈だった。闇の力を解放し、黒い翼が生えていた。瑠璃はその姿に目を丸くする

「…瑠奈、さん…」

「…瑠璃か。悪い、待たせたな」

「…うつ…うつ…」

瑠璃は堪えきれずに涙を流す。瑠奈はその姿を見、瑠璃の頭を撫でる。そして瑠璃に微笑みかけ

「悪いな、瑠璃。本当に待たせちまったな。…俺、少し用事を済ませてくる。風野たちと一緒に待っていてくれるか？」

周りを見ると、瑠奈の一撃で機械兵が一蹴され、辺りは静かになっていた。風野や日向が近づいてきてるのも見えていた

「…私も…」

瑠璃も瑠奈について行くこうとするが、額から流れる血が思ったよりも沢山流れているようで貧血を起こしふらついていた。それを見た瑠奈は瑠璃を制止する

「その状態でついてこられるのは困る」

「で、でも…」

「来るな」

「…」

瑠奈に強く言われ、瑠璃は力なく頷く。それを見た瑠奈は再び笑顔で瑠璃に近づき、軽く抱擁を交わす

「…え…？」

瑠璃は目を丸くする。その中瑠奈は笑顔を崩さず

「ちゃんと帰ってくる。だから、俺の帰る場所、確保しておいてくれ」

そっぴい瑠璃を離し、瑠奈は走って新組織内に入っていった…

「瑠奈さんの帰ってくる…場所…それが…私の…」

「新組織、謁見の間」

「そら、どうした天導誘貴。もうバテたのか？」

「…くっ」

霸天と天導の戦いは、徐々に天導が劣勢に立たされていった。その時ドアが吹き飛び、そこから瑠奈が現れた

「…烈火か？」

「ふむ、来客か…」

霸天と天導は瑠奈に気付き手を止める

「…霸天…貴様…！！」

「何をそんなに死にたがる、烈火瑠奈。我は理解に苦しむぞ…」

「…お前に、聞きたい」

瑠奈はすごい剣幕で霸天に問いかける

「貴様は…世界に、沢山の人間が居るのは知ってるんだろ？何故お前達だけの存在に固執する？」

「私は、私の仲間を愛している、家族なのだ。その家族を守るために驚異を排除するのは当然であろう？」

「…貴様、それが分かっているながら、俺の、俺たちの仲間を…殺す

と言っのか！」

「ふん、汝も巫女と同じ考えか。…甘い、甘すぎる。世界は食つか、食われるか、だ。我は食われたくない。だから我は汝等を食つ。それだけだ」

「…あああああつ！！」

瑠奈は霸天とのやり取りで頭に血がのぼり、能力がさらに解放されていった

「俺は…お前を許さない！霸天！俺はお前を…殺す！！」

20話…輝きは、失わない

「新組織、謁見の間」

「貴様は許さねえ…！俺が殺す！」

「汝の考え方はあの巫女と同様、甘い。甘すぎる。その様な考え方は我が砕く」

瑠奈は力を覚醒させ闇を取り込んでいた。覇天は天導から視線をずらし瑠奈に身体を向けた。天導はその場の空気に飲まれていたが、瑠奈の言葉を素直に受け入れる

「…烈火、君は殺る自信があるのかい？」

「…野暮だな。殺らなきゃならねえ…、瑠璃の為にも、皆の為にもな」

「ふっ…参ったね、どうも。…任せたよ、炎の騎士」

天導がその場から撤退し、場には瑠奈と覇天だけになる。二人は揃って微笑を浮かべながら武器を取る

「こんな簡単にあの呪縛から逃れるとは思わなかったぞ。我は感心したわ」

「あれくらいなら少し寝たら解けたぜ？…わざとなんだろ？」

「ふむ、馬鹿ではないらしいな。確かにわざとだ。でなければあの場で殺せば話は済むのだ」

「ふっ…違いない！じゃ…始めるか！！」

「来い、二重能力者。我が汝の存在を砕いてやる」

覇天は身体の周りに光を集めシールドを生み出す。それを見た瑠奈は闇の力を刀に集め、突撃を行う

「闇斬断”！！」

「ふっ…愚かな」

だが瑠奈の剣撃はシールドに弾かれ、吹き飛ばす。瑠奈は壁に足をつけ、勢いをつけもう一度シールドに突撃する

「！！！」

「うらああああ！！！」

すると2撃目でシールドを打ち破り、そのまま霸天に突撃する

「食らえええっ！」

「はっ！」

だが瑠奈の突撃は霸天の人差し指に止められた。瑠奈の刀の先が人差し指に押さえ込まれたのだ。瑠奈はそのまま地面に着地し突き刺そうとするが、やはり押しきれなかった

「ぐっ……」

「どうした、さっきまでの威勢はどこに消えた？」

「くそがつ……何で……！」

「では……私の番だ！」

そしてそのまま霸天の腕が光った刹那、光が放たれ瑠奈を飲み込み、壁に吹き飛ばされた。その拍子に刀が瓦礫の下に滑っていつてしまった

「……うぐ……！」

瑠奈は背中を打ち付けたが、ダメージはまだそれほど無かった

「……貴様ああああ！！！」

瑠奈は闇の力を拳に集め殴りかかる。だがその拳も立て続けにかわされる。瑠奈が汗を流す中、霸天は涼しい顔で瑠奈の拳を受け止め……

「……！！！」

「”夢惨断”」

霸天の右手に斧が現れ、それが瑠奈の身体斬り伏せた。瑠奈は胸元を斬られ流血をしながら倒れる

「ああああっ……！ぐああっ……」

「ふん、所詮は小物か」

霸天は倒れる瑠奈の身体を踏みつける

「言っただろう？ 我は汝を消すと。我に敗けは無い、許されない」

「……どけよっ！」

瑠奈は力を振り絞り霸天の足を払い立ち上がり距離を取る。胸元か

らは血が滴り落ちるが瑠奈は気にしていないようだだったが、口からも吐血してしまう

「げほっ…！畜生…！」

「ふん…まだ立ち上がるか。その根性は認めるが、もう決着は着いた。潔く死ね」

「…まだ…決着…！！！！」

だが瑠奈は言葉が続かなかった。この瞬間、瑠奈の身体に大剣が突き刺さったのだった。その大剣は霸天が産み出した物で、霸天はその様を見て高笑いをした。瑠奈はその場で立ち尽くすしか無かった。瑠奈はすぐに剣を引き抜くが身体からは血が止まらない

「…が…は…」

「ふはははは！無様だな！この程度で我を止めようなど…」

「まだだ！」

だが霸天が油断している内に瑠奈が突進し、霸天の顔を殴り付けた。霸天は地面に転がりながらもすぐに立ち上がり、頬をさする。目には憤怒の色が映っていた

「…貴様あ…！！」

「へ、へへ…。簡単には…死んでやるかよ…！がはっ！」

瑠奈は半笑いながら血を吐き出し、その場に倒れる。どうやら無理が祟ったようだ。だがそれを霸天は許さず、髪の毛を掴み無理矢理たたせる。瑠奈は半笑い、霸天は怒っていた

「へへっ…どうだ、おい…」

「死に損ないが…我に火をつけたな！」

そして瑠奈を壁に押し付け、手に光を集め出した。瑠奈は出血が多くなりすぎ抵抗が出来なくなっていた

「…う…うっ…」

「ここごと吹き飛ばす」

「！！…な…！」

「死ね、仲間もろとも…！」

そして霸天は生み出した光の珠を瑠奈に当て、それを破裂させた。

するとそれが一気にこの階層を破壊させた

「”デットシャイン”」

「……！！！！」

この光はこの階層、いや、地下世界を破壊させたのだ……。そして……

「崩壊した世界、上層部」

「……ここにも生体反応は、無し……」

霸天は崩壊した地下世界で仲間を探していた。人類さえ消えれば仲間は生きていける。そう信じていたのだ

「……だが、まだなにかを感じる……なんだ……これは……」

霸天は謎の胸のざわめきを感じていた。まだ何かある、と……

「……とりあえずは、私の家族を探さねば……」

「崩壊した世界、下層部」

「……う、う……」

「気が付いたか」

「……！」

あの光が地下世界を包んだ後瑠璃はきを失っていた。そして瑠璃が目覚めると隣には眼鏡が片方割れた零、傷だらけで眠る明源が居た。瑠璃が目丸くしていると零はため息をつく

「……なんだ、俺に会ったのが不服か」

「い、いや……。それより、この状況は……」

「ふう……やはり疑問だな。だが悪いな。俺もあの光を見て、気付いたらここに居ただけだからな」

「……荒れてる……地下が……」

「空洞になっちまったな、大体が」

零が言うように見上げると上は今まで天井があつたのだが、今は全く見えなかった

「さて、ここにいても仕方ない、まずは場所を移動し、こいつが休める場所を探したいんだが…巫女、来るか?」「…はい」

瑠璃は仲間の安否、瑠奈の安否を気になけながらも、まずは零、光源と共に行動することに決めた…

「?????」

「…くつつ…ち…」

瑠奈は地下に居たが、目を覚ました場所は崩落し、自分が居る場所
は理解できなかった

「…ぐはっ…あ…ぐう…」

瑠奈はその場から移動を試みるが、ダメージが深刻で動けなかった
「…こりや、骨だけじゃ済まねえか…。…それにしても、よく生きてた…な」

瑠奈は霸天の一撃に飲まれる瞬間、死を覚悟した。だが今現にダメージはあるものの、生きていたのだ

「…あゝあ…刀も、こりや使えねえなあ」

瑠奈は近くにあった刀の柄を見つけ拾い上げたが、刀の刃はボロボロになっていた

「…さて、どうす…?あ、あれは…」

瑠奈は瓦礫に引つ掛かる布を二枚見つけた。それは瑠奈にとって、
また瑠璃にとって、重山にとって大事な繋がり一品…ハチマキとりボンだった

「…。つつ…と。…あゝあ、あいつの墓、壊れちゃったか…」

瑠奈はそのハチマキを頭に巻き、リボンを右腕に巻き付けた。そして瑠奈はボロボロの身体を瓦礫に預ける。そして刀を上に向け…

「…ったく、死に損ないもいいとこだな…。だが…こうなった以上は後戻りは出来ないな。…霸天、やっぱお前は俺が殺す!瑠璃…皆

…待っててくれ…！」

『それには…私も…入ってる…？』
「？」

瑠奈の横に不意に声が聞こえ振り向くと、イフが消えかかる身体ではあったが居た。瑠奈はその状況に少しは戸惑ったが…

「…悪かったな、無駄に力使わせて」

『んや…まさか長がこんなことするとは思わなかったからね…せめてもの罪滅ぼし…かな？』

「…たたく、誰に似たか知らねえが無茶しやがって」

瑠奈は半ば消えかけているイフの頭を撫でる。その状態にあるイフがどうなるか、瑠奈も分かっているのだ

『…やめてよ、子供じやあるまいし…』

「ははっ…確かに、な」

『…ぐすっ…』

イフは受け入れられないらしく、涙を流す。イフは、能力の酷使により存在を維持できずこの世から消えてしまうのだった。それは死を表すものであったのだ

「…なんて言葉をかけたらいいか分からねえな。今まで仲間が何人か死んでる。だけど、目の前で死ぬのは…無かったからな」

『…死にたくない、死にたくないよ…』

「…俺も、受け入れられない。何故だろうな…」

『助けて…たす…けて…』

イフの姿がさらに薄くなる。そこで瑠奈はイフを抱き寄せる。目には涙が浮かんでいた

「…すまねえ」

『…ぐす…い…いよ…。…る…な…？』

そしてイフは、消える直前に瑠奈に言葉を残す…

『みじか…い、間…たのし…かつ…た。私…瑠奈…が…好き…だった…。瑠璃…ちゃ、んが…羨ま…しい…な…。…』

「…っ！！」

『あ……りがと……う、さ……よ……なら』

「……！」

その言葉を残し、イフは消えた。瑠奈の手にはかすかに温もりが残っていた。それは瑠奈にイフという存在を心に刻むには十分だった……

「……そうか……」

イフに貰った腕輪の石は全て輝きを失い、砕け散った

「……なんなんだろうな、こりや。……なあ」

瑠奈が瓦礫の傍に声をかける。そこには……

サブストーリー…駄弁る、その2

「…ふう、読者の皆、どうも。烈火だ。…話が佳境に差し掛かってんだが、どうもサブストーリーをやらなきゃならないらしい。…面倒くさいがな」

「こら、瑠奈さん？面倒くさいと言っちゃダメですよ？次回からよんでももらえなかったらどうするんですか？」

「そーだよ、兄さん！これで一回リックスして本編を見てもらうのが目的なんだからね！」

「この四人なら、きっと楽しくなるよ！だからがんばろーよ、瑠奈！」

「…あー、ったく」

今回も俺はなんか雑談をしなきゃならんらしい。俺の前には瑠璃、右側に日向、左側に灼沢が座った。…今回は何を話さなきゃなんねえんだ？

「ねーねー瑠璃ちゃん！そー言えば瑠璃ちゃんって王女なんだよね？ご飯とかってやつば豪華だったの？」

日向が瑠璃に昔の食の話を持ち出した。…腹へってんのか？

「そーですねえ…私が地上で食べたものとは全く違うような物が出てたような…」

「やつばキャビアとか、トリュフとか！？」

おい、どんな想像だよ

「いや、でもこつちと料理はたいして変わらないですよ？…えと、エビチリですとか、かに玉ですとか…」…中華かつ！？

「ほえ…」

「意外と普通なんだね」

「そうですかね？」

「んでもってさ、ウチ親があんまし家にいないから自分で料理するんだけど、やつば住み込みのシェフみたいなのがいるの？」

「そうですね、毎日違うシェフが計七人いましたよ」

「かーっ、いいなあ、羨ましい！」

「だよ。私は天さんと一緒に動くようになってからは食べるのも一苦労だったもんなあ……」

「灼沢さんはどんな感じだったんです？」

今度は瑠璃が灼沢に問いを投げ掛けた。…瑠璃、友達増えてよかったな

「私たち…まあ、天さん、風野さん、夢村さん、双葉さん、さらに私をあわせて五人だったんだけど、毎回毎回当番制で代わる代わるやってただけど、まあ料理がうまい人がいなくて…天さんなんか、なんだが分からない獣を狩って来て、それを焼いて食べ始めてるんだから……」

「は、はは…天鳳院さんもワイルドですねえ……」

瑠璃が少し顔を青くしている。…あいつ、そーいうのは苦手なんだな。こっちで飯食つてるときは何でも食ってた気がするんだが…

「そして風野さんはなぜか絶対料理が黒くなるし、双葉さんは包丁の使い方が変でなんか全然切れてない料理が出てきたり……」

「随分大変な生活したんだね、紗菜ちゃん……」

日向が同情の目で見つめている。…なんか、その気持ち分かるぜ、香恋

「にしてもあれだな…なんで急にこんな話になったんだ？」

「え？…なんでだろーね？」

香恋がぼけつとした顔で答えてくる。…はあ

「だと思っただよ」

「えへっ」

「…でも、瑠奈さんも結構料理できますよね？」

「ああ、うちの母親があまり料理がうまくないからな」

「へえ…だ、だったら私が一回作りますか？」

瑠璃がおおずと手をあげて提案してきた。俺は断る理由もなく、とりあえず提案を飲むことにしたんだが…

「ま、まっつてよ、だつたら私も瑠奈の為に料理作るし！」

「ひ、日向さんに光さん！裏切らないで下さい！わ、私も作るから！なんなら勝負しても構わないよ！」

なんかよく分からないことを二人は口走ってる。…なんだってんだよ

「なんでまた勝負なんか…」

「瑠奈は黙つてて！！」

「…！？」

「私たちにもやらなきゃいけない時があるの！！」

「は、はあ…」

そんなこんなでなんか対決をやることになり、この雑談はお開き…。

はあ、料理の話はまた気が向いたら伝えるわ

21話：新章開幕、窮地から始まる

「崩壊した地下。中層部」

「なんなんだろうな、なあ？」

「…気付いてた？」

瑠奈は目の前にある瓦礫の方向に向かい声をかける。するとそこから夢村が現れた。夢村も傷は負ってたが瑠奈とは違い直撃を受けていたわけではないため傷は浅かった。夢村は寂しい笑顔を瑠奈に見せていた

「…消えたのね、イフは」

「…ああ。跡形もなく、な」

瑠奈は右腕を見せる。そこには短いながら石がはまったプレスレツドをした痕があった

「…彼女に、悪いことしたわね…」

「そうでもねえよ。精霊は使役されてなんぼ、らしいからな。…だがよ、少しの間でも、あいつは、仲間だったからなあ…」

瑠奈が涙を流す、そこに夢村が近づき、瑠奈を抱き寄せた

「…！？」

「ごめんね、光さんでもないのに…。でも、いまは…こうしてあげたいの…」

「…：くう…なんだろうな…泣けてくるぜ…」

「無理も無いわ。貴方にとって大事な瑠璃さんは行方不明、一緒に戦っていたイフの消失…不安定にもなるわ…」

夢村は瑠奈を優しく包む。そして、瑠奈は静かに眠りについた。夢村はそれを確認すると瑠奈をその場に寝かし、夢村はその場を去るのだった…

「…今、私は貴方の傍にいたら私も…壊れそう、だから、また後で会いましょう…」

「…腹減ったなあ…」

瑠奈はあの後少し寝てからあるかも知れない町へあてのない旅を始めた。もしかしたら仲間が居るかもしれない、町があるかも知れない…可能性が低い期待にすぎるように瑠奈は歩いていた

「ったく…もう3日…てのもわかんねえな。人工太陽も死んでやがるし、日にち感覚はまるでなくなっちゃったな」

瑠奈の居る場所は常に薄暗く、所々地面が砕けていた。そこからは下の階層の様子が見てとれた

「…ふう、下手に歩いて踏み外したら死ぬな…」

瑠奈は少し顔色が悪かった。確かに常に死と隣り合わせに居ることに、さらに体調不良が重なっていた。多分傷の手当てが出来ず、細菌等にやられてるのだ

「…だけど、俺は…死ぬわけにはいかねえ」

瑠奈は既にボロボロの刀を杖がわりに使い一步一步、歩を進める

「…夢村の奴、柄にも無いことを…」

夢村は瑠奈に布を被せていた。今、瑠奈はそれをマントにし先を進んでいるのだ。そしてある程度進むと目の前に半ば廃墟の町が見えてきた

「…ふう、現状を把握しないことには何も始まらねえ。とにかく、まずは情報収集と鍛冶屋を探さねえとな」

瑠奈は足早に町に向かう、だが…

「半壊の町」

「…ちい、まさかだったな…」

瑠奈は物陰に隠れ、町の様子を探る。なぜかと言えば町に機械兵が配備され、その機械兵が町を巡回してるのだった

「…ちくしょう、これじゃあ住民は全滅か？」

機械兵は無差別に人間を攻撃するため、機械兵が徘徊してると言う

ことはここに住む人々は死んだということになるのだ

「でも、このまま何もしないのも話にならない。どうにか…」

だが瑠奈がこの様に考えてる間に銃弾が瑠奈の頬をかすめた。どうやら見つかったようだ

「！！…ちっ、こうなったらこの町で暴れてやるか！」

そして瑠奈は刀を抜く。傷は全く癒えてないが、それどころではない。瑠奈はまず先陣を切っていた機械兵に刀の一撃を浴びせる。だがこの一撃で刀は折れてしまった

「くっ…！後は腕つぶしだけで…！」

だがここで異変が起きた。地震が発生したのだ。それに伴い機械兵の動きが止まる

「…今だ！」フレア・ビックバン”！！」

その隙をつき、瑠奈は炎の力を最大限に解放、機械兵を残らず焼き付くした。瑠奈は額の汗をぬぐいながら、何かに気付く。先程からある建物から人の気配がしたのだ

「…まさか、生き残りか？…俺が行ったら、機械兵と同じ化け物扱いだったりしてな…。…だが、今の俺は何か頼らなきゃ、もたねえ…行くか」

瑠奈は躊躇いはしたが、背に腹は変えられないためその民家の玄関口に立つ。どうやらインターホンの的なものは存在しないようだ

「…さて、ここからどうするか…」

だが瑠奈が悩む必要は無かった。中に居た何かの方が扉を開けたのだ。出迎えてくれたのは二人の姉妹だった

「…貴方、今、あの機械を…」

髪の長いスラッとした女性、どうやら姉のようだが、その姉の方が話を切り出してきた。だが瑠奈は今立ち話を出来る程体力は残されては居なかった

「…悪い、少し…横に…」

瑠奈は扉の前で倒れてしまったのだった…

「…ん…」

「わひゃう！？…お、起きた？」

「…お前は…」

「ねーちゃん！！炎の人が起きたよ！！」

瑠奈はあの後二人に運ばれベッドに寝かされていた。瑠奈が目を開きますと、先程の妹の方が姉を呼びに走り出していった

「…しっかり生きてやがるな」

瑠奈は天井を見つめながら呟く。それは自分の仲間もこの様に生きていてほしいという暗示のようだった

「…ほらほら、炎の人起きてるでしょ！？」

「あら…目、覚めましたか？」

「…迷惑、かけたようだな」

「いえいえ…」

相手の女性は深々とおじぎをするので瑠奈も返す。その女性はお辞儀を終えるとすぐにへやの奥に消えていく

「…？」

「炎の人は久々の来客だから、今ご馳走つくってんだよ！」

「あ、ああ…すまねえな…」

瑠奈はこの話しかけてくる女の子に見覚えがあった気がするのだ

（…いや、まさか…な。だってあいつに妹や姉が…）

「炎の人？どうした？」

「あ、ああ、すまねえ。…つか、止めてくれねえかな？その炎の人って呼び方…」

「じゃあ名前を名乗ってよ！」

「烈火瑠奈。烈火でいい」

「ふゝん…烈火、瑠奈…」

その女の子は何かを考えながら部屋を出ていってしまった。不思議な雰囲気戸惑いが続く瑠奈だった…

「烈火さん…でよろしかったですか？」

「ああ、それでいいさ」

「はい…こちら、お粗末ながらに昼食です」

あれから少しして姉妹の姉の方が昼食を運んで来てくれた。どうやらカレーらしい

「すまないな、飯までご馳走になるなんて…」

「いえいえ！！あの機械兵を蹴散らしてくれたんですから、これくらいしない！」

女性は手を大袈裟にふりながら受け答えする

「…で、あんたらの名前を聞いてないんだが…」

「あ！そ、そうでしたね！私の名は風季ふうき 冬香ふゆか。名字も名前も名前っぽくて面倒ですけど、冬香ってよんでくれたら嬉しいですよ」

風季は満面の笑みで瑠奈に語りかける。その姿に瑠奈は少し見とれながらもすぐに正気に戻り、カレーを頬張る。風季はそれを見計らい風季もスプーンを動かす

「じゃあ妹さんは…」

「風季 小春こはる。こはるって呼んであげて下さいね」

「へえ…。(…やはり人違いか)」

瑠奈はしばらく振りの食事に少し喜びを覚えながら、冬香に今の地下の現状を聞くことにした

「…いくつかききたい事がある。最近、地下で何かあったか？」

「最近…と言われると(破滅の輝き)の件ですか？」

「破滅の…輝き、ねえ…」

瑠奈に与えた霸天の一撃は地下世界を崩壊させた。それは地下の住民には破滅の輝きと呼ばれているようだった

「…その後は？」

「その光が来た直後、周りを見渡したらこの有り様でした。私の家はこの通り奇跡的に何事もありませんでした…」

「周りは一面焼け野原、瓦礫の山、と」

瑠奈は唇を噛み悔しさを露にする。それを見ていた冬香は不思議そうに瑠奈の顔を見ている

「…どうかされましたか？」

「…その現場に居たんだ。俺と、…仲間が。俺が霸天を止めていれば…」

「霸天？…その方は霸天皇と言う名前ですか？」

瑠奈はその名を聞き冬香を見る。冬香は少し慌てながらも

「その霸天さんは、私たちの町に来ました。そして烈火さんと同じように機械兵を一蹴し、私の前に来て『この地に傷つきし炎の剣士が現れたならば、迷わず助けよ。彼の者はいずれ我と戦う意味を同じくする…だから、助けよ』と言い残して去りました…」

「…？」

瑠奈は解せなかった。確かに霸天は瑠奈を殺しにかかった。霸天の目的は二重能力者等の異端者の殲滅。だとすれば自分といずれ協力することは説明がつかないのだ。それにもう1つ説明がつかないことがあった

「…あいつが、機械兵を蹴散らした…？」

霸天が機械兵に攻撃を加えたことだった。霸天が新組織に攻め行った時には機械兵が侵攻してきていた。これの説明が出来ないのだった

「…」

「烈火さん？もしかして破滅の光の元凶は…霸天さん？」

「ああ…」

「…正直、それでも納得してしまえます」

「？」

冬香が苦笑を浮かべながら話を続ける

「あの力は烈火さんと同等、もしくはそれ以上の強さに見えました。確かに烈火さんは今手負いでしたが…それでも、そんな感じがしました。そのひとが元凶であっても、私は驚きませんよ」

「…そうか。…俺も、あまり長居するわけにはいかねえな」

瑠奈はその場から立ち上がろうとするが、冬香に肩を掴まれ止めら

れた

「…な、なんだ？」

「え、えと…」

冬香の頬が心なしに赤い。瑠奈はそれに気付きおでこをおでこにくつつけた。冬香はそれでさらに顔が赤くなる

「…熱は無さそうだが、具合悪いのか？」

「…つつ？そ、そうじゃなくですね！？烈火さんはまだ怪我が癒えてないんですから、もう少し休んだ方がいいんじゃないかなあつと！！」

冬香が慌てたように言う。瑠奈は不思議に思いながらも

「…だな。確かに冬香の言う通りだ。…悪いが、もう少し世話になつていいか？」

「は、はい！喜んで！」

冬香は顔が赤いながらも満面の笑みで答える。そして瑠奈を残し部屋を後にすると…

「お姉ちゃん、嬉しそうだね」

「ひゃあうっ！？」

いきなり後ろから小春に声をかけられ、びくつく冬香。それを見た小春は笑ながら冬香をいじる

「なに？烈火君にラブなの？？」

「う、う、うるさいよ小春っ！ね、姉さんはただ烈火さんの身体を心配して…」

「それにしても異常に熱心だし…、なんか嬉しそうだし…」

「あゝっ、もう！小春！もう寝なさい！」

「ウシシ…分かったよ、お姉ちゃん…ラブラブ…」

「うるさいなあっ！早く寝なさいよっ！」

小春をへやに寝かせ、足早に部屋を出る冬香。そして自分のへやに入りベッドにダイブし、枕に顔をうずめる。未だに顔は真っ赤だった
「…はあ、なんか、うん…」

そして気付かぬうちに冬香も眠りについた…だが…

「崩壊した町、中央公園」

「…ふう…はっ！」

瑠奈は寝てはいなかった。今、瑠奈は近くにあった鉄パイプで素振りをしていた

「…なぐんて、刀じゃなきゃ身が入らねえな…」

だが瑠奈はすぐに飽き、鉄パイプを放り出す。身体の状態は万全には遠いが、戦うには十分になるまで回復しつつあったのだ。瑠奈は瓦礫に腰かけ、物思いにふける

「あゝあ…残念な姿だよなあ…。この町だって、俺に力があれば守れたってのに…」

だが瑠奈の外出は冬香にバレていたようだ。冬香が近づいてるのが瑠奈にも見えた

「…もう、まだ完治してないですよ？」

「完治はしてねえんだが、やらなきゃならねえこともあるんだ。出来れば止めてほしくないんだが…」

「嫌です、止めます。まだ貴方は治ってないのに、その使命の為に動くのは自殺行為ですよ」

「…俺、異端能力者なんだとよ」

瑠奈が唐突に切り出した話に冬香は目を丸くする

「異端って…誰がきめるんだろうな？」

「…？」

「…冬香から見たら、俺はやっぱり変、か？」

「…」

冬香は答えを考え、そして口を開く。それは瑠奈を驚かすには十分だった…

「いや。だって私も、異端能力者だから」

22話…悲しき刃

「崩壊した町、中央公園」

「…私も、異端能力者ですから」

風季冬香が放った一言…これは瑠奈を動揺させるには十分だった。

瑠奈は冗談目かしに笑いながら答える

「…笑えない冗談だな？」

「冗談なんかじゃありませんよ？私は通常的能力者は持ち得ない」

刃”の能力者…」

「”刃”？…」

「私はこの力のせいでいままで沢山の組織から狙われたり、沢山のお友だちが離れていきました」

「…笑えねえ、な」

「はい、笑えません」

「つらかったのか」

「はい、とても」

「…」

「ですが」

冬香は寂しげな顔で話を続ける

「貴方達のような存在が居ると、いままで信じてました。やっと…会えました」

「…そうか」

瑠奈はその言葉が胸を締め付けた。瑠奈自身はすぐにでも霸天を止めなければならず、それを行うためには一刻も早くここを出なければならぬからだ

「でも…悪いな、俺は長居出来ない。やっぱり約束は反故には出来ない」

「…約束、ですか。…聞いても、いいですか？」

冬香はさっきまでの寂しい顔から、今は笑顔に変わり、瑠奈の隣に座る。瑠奈はそれを確認し、話し始める

「…地下の姫様との約束なんだ。」お前は絶対守る、そして、絶対生きる”ってな。…まあ、こんななつちまったら、約束云々言ってる場合じゃないんだろうが…これがまた頑固な姫様でな。人のために涙を流し、人の幸福で幸せになる…。そんな姫様が、俺と約束をしたってことは、自分の幸福をすっかり追い求め始めた…ってことだからさ。俺…そういうのは絶対守らなきゃっていう感じだから」瑠奈の顔に自然に笑みがこぼれる。冬香はそれを微笑みながら眺めていた。瑠奈はそれに気付き顔を赤くし、頬をかく

「…ま、まああれだ。一応新組織の人間だから、上の人間を守るのは普通だろ？」

「はい、普通ですね」

「…つたく、何か調子狂うな…」

「…ふふっ」

冬香は笑い、その場から立ち上がる

「…とりあえず今日、今すぐ動くのは得策では無いです。いまこの状況下なら、やっぱり…」

だがここで瑠奈が気付く、何かが近くにいたのだ。そして急に冬香目掛け岩が飛んできた

「!？」

「やらせるかつ！」

瑠奈は咄嗟に炎をぶつけ、岩を砕いた。すると瓦礫の影から見覚えのある集団が現れたのだった

「…おーっほっほ！さすがは我が憎き男ですわね…烈火瑠奈!!」

「…ちっ、貴様が…御酒」

現れたのは御酒と、地下闘技大会で戦ったマッスル5だった。御酒は高笑いしながら瑠奈に語りかける

「おーっほっほ！歴戦の剣士も霸天の前では歯が立たず、諦め

て隠居かしら？」

「…霸天の下に下ったクスが何を吠えてる。それに現に俺は生きてる。生きてる限り戦うつもりだが？」

瑠奈のこの言葉に御酒は眉間にシワをよせた

「何を言ってるのかしら？ 私は霸天の一味では無くてよ？」

「…意味わからねえ事を。それじゃああの時機械兵が同時に攻めてきた理由がわからねえんだが？」

「私はあの時は新組織付近には居なかったですし、霸天には私たちが手を焼いてますの」

瑠奈がここでやっと冬香が言ったことに納得が言った。どうやらあの時機械兵は偶然攻めてきたようだ

「…へっ。どのみちお前らも潰すだけだ。その筋肉の塊を連れてきたって事は、俺を消しに来たんだろ？」

「当然ですわ！ 機械兵を遥かに凌駕する新、マッスル5の力、思い知るがいいですわ！ 行きなさい、お前達！」

「了解、御酒様！」

御酒の号令にマッスル5が一団で襲いかかってくる。瑠奈はその内体が拳を振り抜いて来たため、それに対するように拳をつきだす

「小僧が…我の一撃を受けられるかあっ！」

「うらああああっ！」

だが相手はあの時とは比べ物にならないくらい強くなっていた。拳同士がぶつかるが、瑠奈が力負けし瓦礫の山に突っ込んでしまった。場には冬香が残る

「…！！」

「おーっほっほっ！ 口ほどにもありませんわ！…お嬢さんは、私たちに楯突かないのであれば見逃しますか？」

「…いえ、見逃さなくて結構です。私を殺せるなら殺してください」御酒の提案を拒み、その場に力強く立つ冬香。それを聞いた御酒はキレ、マッスル5に激を飛ばす

「貴方達！！ その娘も殺しておしまい！！」

「イエス、御酒様！！」

そしてマッスル001が御酒に飛びかかり、拳を振り下ろす！

「悪く思ふなよ…楯突いた罰だあつ！」

「…悲しみの”刃”…」

だが、拳は御酒の目の前で止まる。御酒は驚いた顔で叫ぶ

「ど、どうしたの001！早く潰しておしまい！」

「…」

「彼はもう死にました」

冬香が冷めた声で答える。御酒は全く意味が分からず続ける

「何を言つてらっしゃるのかしら！？さあ、早くその娘を…」

「”死神の裁き”」

冬香がそう呟いた瞬間、001の腕が肩から斬れ、落ちたのだった。001はそのまま倒れる。どうやら絶命したようだ

「…なつ…！？」

この光景に御酒は言葉が出なかった。冬香はゆっくり顔をあげ、相手を見据える。その瞳は青く澱み、手の甲には”刃”の字が浮かんでいた

「私は…人間凶器なの。だから、筋肉の皆さんには私には触れられない」

「んだと貴様アっ！！」

残り四人が冬香に突撃してくるが、やはり冬香に触れる前に動きが止まる。そして身体から血を吹き出し一瞬でマッスル5を全滅させた。御酒は顔を青くしている

「あ…貴女！一体何を…」

「…この力は…私を…傷つけるの…」

冬香の両腕は血で染まっていた。それを見た御酒は顔を真っ青にする

「まさか…貴女は…！」

「これ以上…私に手を出させないで」

「っっ！！ほざくなあっ！！」

御酒は激昂し、バズー力を取り出す。冬香はそれに気付くが、動こ

うとせず俯く

「ぶつとばせえっ!!」

そして御酒はバズー力を放つ。その弾は冬香目掛けて飛ぶ。ここで冬香が動く

「やめてっ!!」

そして右腕が弾を真つ二つに切り落とす。弾は冬香を避けるように飛び、瓦礫を吹き飛ばした

「くっく!!」

「もう分かったでしょう? 貴女じゃ私は倒せない!」

冬香が一気に御酒に接近しにかかる。御酒は狼狽しながらさらにバズー力を放つが、全て冬香に切り落とされる

「な、な、なんて事!! 私、また負ける!!」

「はっ!」

そして冬香はバズー力をまっぴらに切り落とした。御酒はそのまま座り込んでしまった

「あ、あ…」

「私は…人を傷つけない。だから…私の目の前から消えてください」

「…くっ…! 黙れっ!」

御酒は負けじと腰元から短刀を取りだし冬香に斬りかかる。だがそれは冬香の右腕に打ち払われた。冬香の腕には傷がついていなかった

「…は…!」

「警告を無視しましたね…ならば死んでいただきます!」

そして冬香は右腕を刃に変え、御酒の心臓を貫いた。沢山の返り血を浴びながら右腕を引き抜くと、御酒の身体はそのまま倒れた

「…また…一人…この力のせいで…」

「冬香っ!!」

そこで瑠奈もやっと瓦礫の中から這い出て、冬香の所へ駆けってくる。血塗れの冬香、心臓を貫かれ死んでいる御酒を見て状況はすぐ飲み込んだが、悔しさが瑠奈の中に溢れていた

「……!!」

「ごめんなさい……私……私……!」

「お前は悪くねえよ。悪いのは御酒、こいつだ……」

「……帰ります」

「俺ももう少し居させてもらっていいか?」

瑠奈が先に行こうとする冬香に問う。冬香はすぐに振り返り、涙を流しながらも笑顔で答える

「はい、どうぞ」

そうして瑠奈と冬香は家に帰る。瑠奈が手を引つ張りながら……

23話…新たなる剣

「崩壊した町」

「…おはよう…」

「あ、おはようございます、烈火さん♪朝御飯が出来るまでもう少し待ってくださいね♪」

「…わかった…」

「…？」

「朝…弱いんだ…気にするな…」

「あ、はい…」

「烈火君！おはようだぞ！」

あれから一週間、瑠奈は傷を癒すために冬香の家で休養に励んでいた。一週間立ったお陰でなんとか瑠奈はある程度の回復を見込めていた。だが刀が無く、武器が欲しい瑠奈は食卓を囲みながら冬香に問う

「…なあ、冬香…」

「なんです？」

「…ここら辺に武器屋か鍛冶屋…ねえか？」

「…また唐突なことを聞いたものですね？えーと…小春？」

「ん？なーに、姉ちゃん？」

「鍛冶屋…であれば、あの人ですかね？」

「山熊じいの事？」

「…山熊…？」

冬香と小春が鍛冶屋の話をしている。どうやら武器屋では無く鍛冶屋を紹介してくれるらしい

「そう、山熊さんやまくまですね♪たしか…」

「生きてれば鉾山に居るはずだよ？」

「…生きてればねえ？」

「いや、多分あの方も生きてますよ、しぶとい人ですからね」
冬香が笑って答える。瑠奈はこれからやる事がこれで明確になった
「じゃ、その山熊のじいさんに言えば、刀を直してもらえるな？」
「あ、はい」多分大丈夫だと思いますよ」
「じゃ、その場所を教えてください。そこに行くわ」
そして冬香に場所を聞き、瑠奈は山熊という人物が居る鉾山に足を
運んだ…

Ⅱ 鍛冶屋、山熊Ⅱ

「…鉾山、ね」

瑠奈は町外れにあつた鉾山に足を踏み入れていたが、そこは既に資
源がとりつくされたような鉾山だった

「…」

「ぬ、来客か…珍しいのう…」

「お前が山熊…か？」

奥からハンマーを持った老人が現れた。この人物がどうやら山熊と
言う鍛冶士らしい。瑠奈は布に巻いた砕けた刀を見せる

「悪いが、この刀を直して貰いたいんだが…」

「小わっぱ、誰からワシの話を聞いた？」

「ん？風季だ」

「風季とな？あの小娘か…まだ生きておったか」

「…なんだよその言い方、まるで死んでほしかったみたいな…」

「ふむ、すまない。そのようなつもりは無かったのだが…」

「…ならいいが…」

山熊はアゴヒゲをなぞりながら刀を受け取り、見つめる

「ふむ、これはまた随分の年季物だな。中々手入れも行き届いてい
たようだ」

「それはそうだ。共に戦わなきゃならねんだから、切れ味が無か
ったら話にならねえだろ？」

「よく分かつておるな、嫌いではないぞ。…で、何故直す？刀なんぞいくらでもあるぞ？」

「…なんでだろうな？」

瑠奈が周りにある刀を適当に振り、その場に戻す。そして瑠奈が笑いながら話を続ける

「簡単に言えば金がねえ…つてのもあるが、実際、やっぱり最後まで一緒にいたんだ、こいつは。だったらやっぱり最後までこいつで戦いたい、かな？」

「ふっ…いいじゃろ。直してやる。お代は取らぬ。しっかりした刀に直してやる」

「ありがてえ。頼んだぜ、山熊！」

「あ、それとじゃな…お主、能力者じゃろ？」

「？そうだが…」

「だったら、おもしろい金属を使ってやる。楽しみに待っておれ」

「ああ…」

そして瑠奈は鉾山を後にする。刀の修復完了は三日後、それまで何も起こらなければいいが…

「崩壊した町、風季家」

「ただいま」

「おかえりなさい、烈火さん♪」

瑠奈が帰ると、冬香がご機嫌の様子で出迎えてきた。瑠奈が不思議そうに見つめると、冬香がその理由を教えてくれた

「今日の晩御飯はオムライスですよ？♪今日はとってもいい卵を使ってるんで、ほっぺたが落ちちゃいますよ？♪」

「…どうした？随分ご機嫌だな」

「だって…烈火さんのお役に立てたと思うと嬉しくて…」

冬香は瑠奈が持っていた刀の残骸が無いのを見て喜んでいたので「…そうか、よかったな？」

「まあ、そんなわけで細やかなお祝いですよ、食べましょう？冷めちやいます」

そうして冬香は瑠奈の手を引く。瑠奈はその姿を見て微笑ましく思いながらそれについていく。細やかな平安を瑠奈は感じていた…

「崩壊した町、夜」

「…すう」

「やつと寝たか…」

「そうですね？」

瑠奈と冬香は小春とご飯を食べたあと、三人ですつと色々な話をし、時間をすごし、いま小春を寝かした所だった

「全く…地上つてそんなにもしろそうか？」

「小春にとつたらそうなんですよ、だって15歳ですから…」

「15か。…そういや、冬香の年齢を聞いてなかったな？いくつだ？」

「私ですか？22ですよ？」

「…同じ年か。まあさほど意外ではないな」

「ふふっ…」

そのまま瑠奈は小春が寝るベッドにもたれかかる。冬香もそれを見て瑠奈の隣に座る

「…たいして時間も経ってねえのに、なんか、随分な年が経った気がするな…」

「…まだ、これからですよ？霸天さんを、止めるんでしょう？」

「ああ、止めるさ。仲間達と一緒にな」

「…そういうば、お仲間さんは無事なんですかね？」

「さあな。だが、無駄に死に損ないの連中だって事は言えるかな」

「信用してるんですね…」

「ああ…そりゃあな…」

「…烈火さん？あの…」

「待て」

瑠奈が冬香の言葉を遮る。冬香が目丸くする中、瑠奈が告げる
「…無下に拒否る必要性は無いとは思うが、小春はどうする？置いていくのか？」

「…小春は、山熊さんに任せようと思うんです」

「あの爺さんか…悪くは無いが…」

「小春は、もう子供じゃないんです。…実は、既に話しています。

『頑張つてね、お姉ちゃん』と、送り出されたんです」

「…はあ…お前も、瑠璃と変わらねえな…」

「瑠璃…？」

「俺と約束を交わした、地下新組織の代表さ」

「…その方と、烈火さんの関係は…？」

冬香が少し悲しそうな声で瑠奈に聞く

「…俺は、それに仕える騎士、かな？」

「…そうですか…」

冬香が複雑な表情を浮かべる。瑠奈は暗くてそれを確認できなかった

「…やっぱり、私は烈火さんに付いていきたい…。この世界をなんとかしたい。それに、烈火さん達と同じ能力者さんとも、出会いたい…」

「…いいだろう。だが、悪いが冬香の命は、自分で守って欲しい。

それと…死ぬなよ」

「…はい。…あ、あの…」

冬香がおずおずと瑠奈の手を握る。瑠奈は少し驚きながらも、拒否はしなかった

「…」

「ありがとうございます…やっと…居場所が見つかった気がします

…」

「…良かったな」

「…はい」

こうして、瑠奈と冬香が眠りについた。これから始まる戦いの前の、

一時を噛み締めながら…

「崩壊した地下、上層部」

「…やはり、か…」

霸天は瓦礫に腰かける。霸天は気付いたのだ。もう既にこの世界に自分以外に精霊が居ないという事が…

「…我は、間違っていたのか…我が、家族を殺してしまったようだな…」

霸天はそして、前を見据える。そこには大量の機械兵が向かってくるのが見えた

「…せめてもの罪滅ぼし、とは言わぬが…烈火瑠奈よ、光瑠璃よ…。我は、もう少しお主らと話合えれば良かったのだな…。…我は、汝らを許さぬ。かかってまいれ！」

その言葉に呼応するように機械兵を掻き分け、一人の男が出てきた
「さすがに気付くのが遅すぎたようですな？…精霊の長よ」

「…汝が、この機械兵を統べるものか」

男は不敵な笑みを浮かべて告げる

「俺は神崎 かんざき 亜輝兜 あきと…この世界を破滅、再生に導く神だ！！」

神崎は白い髪をなびかせ、機械兵を進撃させる。霸天は岩の短剣を生み出し応戦の構えを見せる

「破滅されては我の家族に面目が立たぬ…悪いが、抗わせてもらうぞ！神崎とやらー！！」

「崩壊した町、鉦山」

「…来たか、小わっぱ」

「おう、約束通り3日経ったが…出来たか？」

「む…後ろの娘二人は…」

「山熊さん、お久しぶりです」

「おじちゃん、お久しぶりーっ！」

「ふむ…風季姉妹か。元気そうで何よりじゃ」

「はい。それで山熊さん…」

「分かっておる、小春を面倒見とればいいんじゃない？」

「おじちゃん、お願いしますっ！！」

元気よくお辞儀する小春に、山熊は笑みを浮かべて快諾した。次に山熊は瑠奈の方に向き

「ほれ、お主の刀だ。なんとか修復できたぞい」

「すまねえな…ん？」

「気付いたか…こわっぱ。これは昔のお前の刀では無いぞ…お主に扱えるかな？」

「…何を仕込んだかは知らねえが…さあっ！」

瑠奈は山熊の目の前で岩を断ち切って見せた

「…！！」

「ふむ…さすがの切れ味じゃ」

「や、山熊さん？一体何を…」

冬香が山熊に訊ねる。本来は刀は岩を斬れない筈なのだ

「”覚醒岩”を使わせて貰った。能力を吸い上げ、それを力に変えるのじゃ。今回は力では無く切れ味が向上したんじゃない？」

「ふっ…随分と珍しいものを使っただな。だが、ありがとよ！」

「だが気を付ける。先程も言ったがその刀は能力を吸い取る。と言うことはお主の能力が弱いとき、もしくは全く無くなればなまくら剣と変わらない。それに心的疲労は免れぬだろう…」

「ふっ…何を今さら！絶対使いこなすさ！じゃあ…行かせてもらうぜ！」

「じゃあ、山熊さん、私も行きますね」

「おう…しっかり生きて帰ってくるんじゃないぞ、冬香」

「はい」

そして二人は鉱山を後にする。そして町の出口に差し掛かった時だった

「…！！」

瑠奈が一足早く気付いた。上層部から瓦礫の山が降ってきたのだ

「…え…」

「しゃがめ、冬香！」

冬香は瑠奈の指示通りしゃがむ。そして瑠奈は先程山熊から受け取った刀を鞘から抜き、構える

「まさか…烈火さん!?」

「吸えるもんなら吸っておけよ…！しっかり解放させてやつからな…！」

瑠奈は力を解放する。そして刀に炎をまとわせ…飛び上がる

「俺の力で…生を掴む！！”崩壊花火”！！」

そして瑠奈の必殺技を瓦礫に叩き込むとすごい爆音と共に瓦礫を粉砕した。瑠奈は反動で地面に叩きつけられるが、ダメージは無かった

「…！！これが…烈火さんの…」

「ふう…てて…。確かに扱いにくいが、これくらいならいける！」

瑠奈は刀を鞘に納め、手応えを掴んだ。そして瑠奈と冬香は足早にその場を去る。覇天を追うために…

24話…大切なヒト

「崩壊した地下、中層部」

「…はあ、弱ったなあ…」

「どうしたんですか？烈火さん？」

「よく考えたんだが…こんだけ崩壊してるって事は、昇降エレベーターも使えねえよな…？」

「そうですね？」

「…はあ…」

瑠奈が大きな溜め息を吐く。瑠奈と冬香は地下の様子を探るべく、中層部からの脱出を試みようとしていたが、上層にせよ下層にせよ移動には昇降エレベーターが必要だった

「根本的にここが何階層かも分からねえ。…当然冬香も分からないんだよな？」

「はい…私も、地下にそんなに沢山の層があるとは知りませんでしたから…」

冬香は困り顔で答える

「闇か、炎の力を覚醒させれば翼を使って飛ぶことも出来るんだが

…」

「でもそれで人を運ぶことは…」

「勿論、出来ない。…はあ…」

「弱りましたね…」

瑠奈と冬香は進んでいくうちにとつと行き止まりにぶち当たってしまった。…だが、この行き止まりにある壊れた建物には瑠奈は見覚えがあった

「…？これは…」

「烈火さん？」

「…冬香。そういやお前の住む場所から、新組織へエレベーター無しに来ることは、可能だったか？」

「は、はい…そうですね…」

冬香は質問の意味を理解出来ていない顔で答える。だが瑠奈はこれで疑問が確信に変わった。そう、ここは何を隠そう…

「ここは…俺が仕えてた、新組織だ」

「！？」

冬香は驚いていた。あの輝きによって、建物は影がようやく残っているくらいにまで壊れていて、破壊力が凄まじかったことを目に焼き付かせたのだ

「…こんな…有り様に…」

「冬香、ちよつと下がってくれねえか？」

「え？は、はい…」

冬香を少し後ろに下げると、瑠奈は刀を抜き、炎をまとわせる

「…もしかしたら、俺の友人が居るかも知れねえ。…入り口を塞ぐ瓦礫を…吹き飛ばす！」

そして瓦礫の山まで走り、そして刀を振りきる！

「”崩壊花火・地”！！」

その力は刀に吸われては居ても衰えた節は無かった。炎は瓦礫を吹き飛ばし、新組織の入り口が見えた。瑠奈は解放を止め、刀を鞘に納め冬香を手招きする

「悪いな冬香。ちよつと寄り道させてもらっぜ？」

「構いませんよ？私は烈火さんに付き添っているだけですから」

瑠奈の言葉に冬香は笑顔で答え、瑠奈の後に続いて歩き出す…

〓 新組織 〓

「…こりゃあ、ひでえ…」
「…」

瑠奈と冬香は瓦礫をどかしながら新組織の内部を進んでいたが、あまりにも倒壊が進んでいた為難航していた

「…ったく、どんな威力だよ…あの輝きはよ…」

瑠奈は瓦礫を刀で破壊しながら進む。だがあの時の事を考えながらの作業で中々進まない。それを冬香は心配そうに見ている

「…烈火さん？大丈夫ですか…？」

「あ、ああ…。…どうやらここにも誰も居ない、か…」

「…一人くらい居ても不思議じゃないんですけどね…」

「でもま、この建物の形が残ってるって事は、もしかしたら誰か居るかも知れねえ…。もう少し奥に…」

だがここで瑠奈が変わった物を踏んだ。瑠奈が足をよけるとそこには焦げた大剣があった…

「…紗菜の…大剣…!？」

「烈火さん？」

瑠奈がその近くの瓦礫をどかす。するとそこには…

「…紗菜!？紗菜っ!！」

灼沢が、その瓦礫の下敷きになっていた。瑠奈が灼沢を抱き起こす

「…おい、紗菜!！しっかりしろっ!！」

「…ん…？」

灼沢は怪我を負っては居たが、さほど深手では無かったようだ

「…兄…さん」

「生きてたか…良かった…」

「…むしろ…あの衝撃波に飲まれて…よく…生きて…」

「俺も傷は深い…まだ完治はしてないが、そうも言ってられねえ…」

「…烈火さん、この女性は何？」

冬香が不安そうな声で聞く。瑠奈はそれに気付き、灼沢を紹介する

「こいつは灼沢紗菜。名字は違うが、ちゃんと血の繋がった兄妹だ」
「兄妹…ですか」

「…新しい、仲間…？」

「あ、はい。風季冬香ともうします」

冬香がお辞儀をする。灼沢はそれに戸惑っているようだった

「…動けるか、紗菜？」

「ちよつと、無理…かな…。どうやら足を…使えないみたい」

灼沢は瑠奈に足を見せる。灼沢の足は血だらけで、全く力が入っていないようだった

「分かった。じゃあせめて、休める場所を探してきてやるから、それまでここで待ってる」

「分かった…」

灼沢は力無くうなずくと、そのままそこで眠りについた。どうやら全く寝てなかったらしい

「奥に行くぞ」

「…はい」

（…灼沢がここに居た。だったら瑠璃も、ここに…）

瑠奈は瑠璃が新組織にいるだろうと思い、搜索を続けた。だがここにも瑠璃が居ないどころか誰も見つからなかった。瑠奈はとりあえず灼沢を自室のベッドに寝かせ。部屋を出たところで冬香に話しかける

「…もう少ししたら、ここを出る」

「では…灼沢さんをここに置いていくのですか？」

「…ああ、仕方ねえ。あいつを今戦闘に巻き込みたくない」

「でも、私たちが保護しなければ…」

「…だから、良いつて言ってるんだよ」

瑠奈が言葉を荒げると、冬香は黙ってしまった。瑠奈がそれに気づき、頬をかく

「…悪い、つい…」

「いえ…それが烈火さんの優しさだと思います。私に、反論する権

利はありませんよ」

「そんなにかしこまられても困るんだが…まあ、反論されても意見は曲げない。あいつは置いていく…。…ん？」

しゃべっている最中に、瑠奈は何かに気付いた。冬香はそれに気付かなかったようで、瑠奈の様子が変わった事に驚いている

「どうしたんですか？」

「…どうやら、紗菜以外にも生き残りが居たみたいだな…斗真！」

「…ばれてたツスね」

瓦礫の影から現れたのは…大門だった。傷は無く、元気そうだった「なんとか寝るところを確保しなきゃならなかったツスから、灼沢さんの事については…」

「分かってる。仕方ないさ。こんな事があつたんだ…生きてただけでもうけもんだ」

「…で、その人は誰っすか？」

大門は瑠奈の後ろに居る冬香に疑問を投げ掛けた

「こいつか？こいつは風季冬香。地下の町に住んで、今は俺と行動を共にする仲間だ」

「へえ…」

大門は冬香の全身を舐め回すように見る。冬香はお世辞ではないレベルの美貌を持っていたので仕方なかった。冬香はその視線に恥ずかしがる

「あ、あの…」

「あ、すまないっす」

「…斗真」

「悪かったっすよ…」

瑠奈は呆れ顔で大門を見る。二人の視線に耐えかねたか、大門は視線を逸らしながら謝った

「…斗真、地下のリンクはまだ繋がってるか？」

瑠奈は唐突にこんなことを切り出した。瑠奈が気になったのは、斗真を用いれば地下をまた行き来できるかどうかを聞いているのだった

「…いや、無理ッス。なんとか地上へ行くのは可能っスけど…」
「地上…？」

地上と言っ言葉に冬香が反応する。その様子に気付いた瑠奈が何か考えている

「…」

「どうしたッスか？瑠奈さん…」

「…斗真、だったら俺、灼沢、冬香を地上に行かせてくれないか？」
瑠奈は大門にそのような提案をする。冬香は驚き、大門はその意図を読み取ったようだ

「分かったッスよ。じゃあリンクを張るんで、少し待ってくださいッス」

「…烈火さん？」

「今は状況が状況だ。灼沢をまず地上にある俺の家で休ませる事にする」

「…本当にそれだけが目的ですか？私の事を気遣って…」

「さあ、冬香は少しここで待っていてくれよ！ちよっと外出てくるわ！」

そっいい瑠奈は外に向かうのだった…

「崩壊した地下、中層部新組織前」

瑠奈は新組織から出ると、急に目付きが変わった。どうやら先程気付いた気配は大門では無かったようだ。刀を抜いて、構える

「…”烈火尖”…！」

そして瓦礫に向けて炎を飛ばす。するとそこから人が一人現れた。

…木山田だった

「…首、頂戴」

「木山田…か。地上での戦い以来だな」

「戯れ言無用、勝負！」

そっいい木山田が高速で接近、短刀で瑠奈に斬りかかる。その短刀

を瑠奈は難なく受け止め、払い除ける

「ふんっ、お前なんか驚異には成り得ねえ。とつとと失せる！」

「……」 乱れ木枯らし」

木山田は体勢を建て直し、今度は木の葉を瑠奈に飛ばしてきた。木山田が飛ばす木の葉はまるで刃のような物だが、それは瑠奈が刀のひと振りで産み出した炎で焼け落ちた

「……」

「随分と適当な攻撃だな……甘く見られたもんだぜ。だったら一気に決めてやる！！」

瑠奈は炎を刀にまとわせる。崩壊花火の構えだった。そして飛び上がり技を放とうとするが……

「でやああああっ！！」

「放て！」

だが瑠奈の体に植物の根が突き出した。瑠奈は一瞬反応が遅れ、若干胸が挟まれるが大事には至らなかった。直ぐに瑠奈は体勢を立て直す、胸からは血が滴っていた

「……っ！！」

「仕留め損ねたか」

「まさか……そう来るとは思わなかったぞ。だったら……一撃で仕留める！」

すると瑠奈は刀を地面に突き立てる。すると瑠奈の周りで炎が渦巻き始めた。そして瑠奈が木山田と語り始める

「……木山田、お前は忍なら……主君が居るんだろ？」

「だから何だ」

「俺にも守りたい、主君が居るんだが……そいつを守りたいって時は、普通以上の力が沸くよな？」

「黙れ」

木山田は木の葉を集め、瑠奈に向け標準を定めていたが、瑠奈は構わず炎の力を増大させながらしゃべる

「命を賭けるくらい大事な人が居る同士……お互い、それをみせてや

ろうぜ！！はああああつ！！」

そして瑠奈は刀を引き抜く。すると渦巻いていた炎が刀に纏い、大きな一本の炎の剣が完成した。木山田はその姿に驚き、動きが止まる。瑠奈はその隙を逃さなかった

「……！！？」

「俺はああああつ！！貴様を、たおおおつす！」希望・豪焰斬”
つつつ！！」

そしてその炎の剣は木山田を飲み込んだ。そして瑠奈が解放した力を解くと、炎の剣は先程の刀に戻り、瑠奈の手に収まった。瑠奈は額の汗をぬぐい、大きく息を吐いた

「……今のは……」

どうやら木山田は仕留め損ねたのか、それとも完全に燃え尽きたのか、死体は見当たらなかった。その騒ぎを聞き付けた冬香がその場に現れる。冬香の目には、何かがつけた大きな傷跡が残る大地に佇む瑠奈の姿があった……

「……烈火さん、今……」

「害虫駆除、だ。俺が言えるのはそれだけ」

「教えてください！！」

「……！！？」

冬香がいきなり大きな声をあげる。その目には涙が浮かんでいた

「……冬香？」

「私にも、教えてください。貴方たちが巻き込まれている事に。私も、巻き込んでください！」

「何がお前をそうさせる？」

「……！！？」

今度は瑠奈が冬香に問いかける。瑠奈の目は真剣そのものだった
「別に冬香が俺らの件に首を突っ込むのは構わない。だが言っただけだ。自分の身は自分で守れと。……今の俺を見て、どうだ？」

瑠奈は手を大きく広げる。胸元から血が滴っているのを冬香に見せるためだ

「…っ！」

「一歩間違えれば俺が死んでいた」

「…」

「俺はこの生活は嫌だ。死と隣り合わせ…何も楽しくねえ。なのになぜ冬香は首を突っ込みたがる？」

「…私の…お父さんは…」

その時だった。不意に上から音が下ので二人が上を向くと瓦礫の山が降ってきた

「…！！？」

「ちいっ！どけっ！」

瑠奈は咄嗟に冬香を吹き飛ばし、力を解放しようとするが…解放した瞬間、目の前が一瞬だけ白黒になり、瑠奈に頭痛が走った

「っっ！…はあっ！」

瑠奈はそのまま炎を瓦礫にぶつけ破壊する。だが瑠奈はそのまま膝をついた。瑠奈は頭痛が収まらなかった

「…ぐうつ…！頭がっ…」

「烈火さん！？…え…？」

冬香が駆け寄るが、瑠奈を前にして立ち止まる。何故なら…

「烈火さん…身体が…！」

瑠奈の身体が、消えかかっていたのだった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024v/>

∞CHAOS～REMEMBERS～

2011年12月7日09時47分発行